

K-518

米沢市埋蔵文化財調査報告書 第21集

# 比丘尼平

発掘調査報告書

1988

米 沢 市  
米 沢 市 教 育 委 員 会

米沢市埋蔵文化財調査報告書

比 丘 尼 平 遺 跡

昭 和 63 年 2 月

米 沢 市 教 育 委 員 会

## 序 文

この報告書は、米沢市都市計画道路米沢駅東線の造成に伴う比丘尼平遺跡の緊急発掘調査報告書です。

比丘尼平遺跡は、本市遺跡の中でも重要な遺跡の一つで、昭和53年10月に八幡原工業団地公共下水道管理設工事に伴う発掘調査において、県内で最初の方形周溝墓が発見された経緯があります。その後、昭和54年4月にも水田用水路取付工事に伴う緊急調査を実施しており、今回の調査は第3次の調査となります。

8月～9月の2ヶ月にわたる調査では、柱穴群を中心とした遺構群が調査区全域にわたり確認され、奈良・平安時代と推定される掘立建物も検出されました。又、遺構の未検出地も遺跡の範囲を確認する重要な決め手となることから貴重な資料が得られたと考えています。これらの資料は、郷土の歴史文化研究に新たな1ページを加えることとなりました。

本市教育委員会では、より豊かな往み良い郷土を築くため、埋蔵文化財の保護保存にいっそう努力する所存です。本書が市民並びに関係者にいささかなりとも貢献できれば幸です。

最後になりましたが、本調査にあたり格別のご協力、ご配慮を賜わりました文化庁、山形県教育庁文化課、まんぎり会、置賜考古学会、地元地権者及び上郷地区史跡保存会、上新田地区的皆様、さらに本市建設部都市計画課に対し、心から感謝申しあげます。

昭和63年3月

米沢市教育委員会

教育長 小口 旦

## 例　　言

1 本報告書は『米沢市都市計画事業、3・2・25』米沢駅東線道路改修工事に係わる緊急発掘調査報告書であり、昭和53年の下水道管理設工事に伴う第Ⅰ次調査、水田用排水路工事に伴う第Ⅱ次調査、そして今回の第Ⅲ次本調査を一括する最終報告書である。

2 発掘調査はⅠ次・Ⅱ次を米沢市教育委員会、まんぎり会、置賜考古学会が主体となって、米沢市都市計画課と協議の上で実施し、最終年度の第Ⅲ次調査は米沢市都市計画課と協議し米沢市教育委員会が主体となって実施したものである。

3 調査体制は次の通りである。

調査総括 安部敏夫(社会教育課長)

調査担当 手塚 孝

調査員 菊地政信、金子正廣、橋爪 健、茨木光裕

調査補助員 夫戸則昭、原 三郎、秦 昭繁

調査作業員 鳴貫六助、藏田清二、我妻徳枝、遠藤昭一、佐藤峯雄、我妻二雄、加藤輝参、勝見文男、安部富男、星 武、星 宮夫、鹿野浅吉、手塚武雄、佐藤みよし、菊地そのゑ、夫戸豊子、山口とみ、我妻よしえ、長谷部いせ子、皆川清助、会田仁一郎、古川新次郎、東谷新七、穂積一之、我妻益男、來次正雄、遠藤利一、鈴木繁美、戒谷金一、斎藤和則、塙原 調、高橋光男、鈴木 修

調査指導協力 加藤 稔、川崎利夫、佐藤鎮雄、佐藤庄一、山形県教育庁文化課、米沢市建設部都市計画課、まんぎり会、置賜考古学会、山形大学教育学部史学研究室、上郷地区史跡保存会、上新田地区総代

事務局 平間重光、梅津幸保、山田 隆、我妻重義、角屋由美子

4 挿図の縮尺は土器が3分の1、2分の1、石器は原寸とし、図版の石器も同様である。遺構についてはスケールを呈示しているので、不同とした。

5 本書の作成はすべて手塚 孝がその任務にあたった。

# 本文目次

(題字は米沢市教育委員会教育長 小口 亘による)

序文	
例言	
第1章 遺跡の概要	1
第1節 遺跡の位置と地形	1
第2節 調査に至るまでの経過	1
第2章 比丘尼平遺跡の発掘	2
第1節 第Ⅰ次調査	2
1) 調査の経過	2
2) 検出された遺構	2
: 方形周溝墓	2
: 竪穴住居跡	3
: 土壙	3
: 挖立建物跡	3
3) 検出された遺物	4
: 繩文時代の遺物	4
: 土器	4
b類土器	4
石器	4
: 古墳時代の遺物	4
a'類土器	5
a''類土器	5
a'''類土器	5
b類土器	5
c類土器	6
d類土器	6
d'類土器	6
d''類土器	6
e類土器	6
f類土器	6
: 奈良・平安時代の遺物	7
4) 小結	7
第2節 第Ⅱ次調査	7
1) 調査の経過	7
2) 検出された遺構	7
: 方形周溝墓	7
: 挖立建物跡	8
3) 検出された遺物	8
4) 小結	8
第3節 第Ⅲ次調査	8
1) 調査の経過	8
2) 検出された遺構	9

：掘立建物跡	9
BY 1	9
BY 2	9
BY 3	9
BY 4	9
：柱穴群	9
：風倒木塘	11
3) 検出された遺物	11
土器	11
陶磁器	12
石器	12
4) 小結	12
第3章 総括	12
第1節 縄文時代	12
第2節 古墳時代	12
1) 米沢盆地の古式土師器	13
2) 集落跡墓制	13
第3節 歴史時代	14

#### 付表

第1表 第Ⅲ次調査柱穴計測表	10
第2表 米沢市内の方形周溝墓分類表	62

#### 挿図目次

第1図 比丘尼平遺跡付近の地形図	15
第2図 比丘尼平遺跡出土古式土師器実測図(1)	16
第3図 比丘尼平遺跡出土古式土師器実測図(2)	17
第4図 比丘尼平遺跡第Ⅰ次、Ⅱ次調査グリッド・トレーンチ配置図	18
第5図 比丘尼平遺跡第Ⅰ次調査Ⅲ区造構全体図	19
第6図 比丘尼平遺跡第Ⅰ次調査第1号方形周溝墓平面図	21
第7図 比丘尼平遺跡第Ⅰ次調査第1号竪穴住居跡平面図	23
第8図 比丘尼平遺跡第Ⅰ次調査第1号建物跡平面図	24
第9図 比丘尼平遺跡第Ⅰ次調査出土土器拓影図(1)	25
第10図 比丘尼平遺跡第Ⅰ次調査出土土器実測図(1)	26
第11図 比丘尼平遺跡第Ⅰ次調査出土土器実測図(2)	27
第12図 比丘尼平遺跡第Ⅰ次調査出土土器実測図(3)	28
第13図 比丘尼平遺跡第Ⅰ次調査出土石器実測図(1)	29
第14図 比丘尼平遺跡第Ⅰ次調査出土石器実測図(2)	30
第15図 比丘尼平遺跡第Ⅰ次調査出土石器実測図(3)	31
第16図 比丘尼平遺跡第Ⅰ次調査出土石器実測図(4)	32
第17図 比丘尼平遺跡第Ⅱ次調査造構全体図	33
第18図 比丘尼平遺跡第Ⅲ次調査グリッド配置図	34
第19図 比丘尼平遺跡第Ⅲ次調査造構全体図	35

第20図	比丘尼平遺跡第Ⅲ次調査南壁セクション図	36
第21図	比丘尼平遺跡第Ⅲ次調査A区平面図(1)	37
第22図	比丘尼平遺跡第Ⅲ次調査A区平面図(2)	39
第23図	比丘尼平遺跡第Ⅲ次調査A区平面図(3)	41
第24図	比丘尼平遺跡第Ⅲ次調査B区平面図(1)	43
第25図	比丘尼平遺跡第Ⅲ次調査B区平面図(2)	25
第26図	比丘尼平遺跡第Ⅲ次調査B区平面図(3)	47
第27図	比丘尼平遺跡第Ⅲ次調査BY 1 平面図	27
第28図	比丘尼平遺跡第Ⅲ次調査BY 2・BY 3 平面図	50
第29図	比丘尼平遺跡第Ⅲ次調査BY 4 平面図	51
第30図	比丘尼平遺跡第Ⅲ次調査柱穴平面図(1)	52
第31図	比丘尼平遺跡第Ⅲ次調査柱穴平面図(2)	53
第32図	比丘尼平遺跡第Ⅲ次調査柱穴平面図(3)	54
第33図	比丘尼平遺跡第Ⅲ次調査柱穴平面図(4)	55
第34図	比丘尼平遺跡第Ⅲ次調査柱穴平面図(5)	56
第35図	比丘尼平遺跡第Ⅲ次調査柱穴平面図(6)	57
第36図	比丘尼平遺跡第Ⅲ次調査出土遺物実測図	58
第37図	比丘尼平遺跡第Ⅰ～Ⅲ次調査遺構全体図	59
第38図	米沢市内の方形周溝墓(1)	60
第39図	米沢市内の方形周溝墓(2)	61

## 図 版 目 次

第1図版	比丘尼平遺跡第Ⅰ次調査の発掘(1)
第2図版	比丘尼平遺跡第Ⅰ次調査の発掘(2)
第3図版	比丘尼平遺跡第Ⅲ次調査の発掘(1) (堂森山から遺跡全体を望む、発掘風景状況)
第4図版	比丘尼平遺跡第Ⅲ次調査の発掘(2) (A区遺構全景)
第5図版	比丘尼平遺跡第Ⅲ次調査の発掘(3) (調査区全景)
第6図版	比丘尼平遺跡出土の遺物(1)
第7図版	比丘尼平遺跡出土の遺物(2)
第8図版	比丘尼平遺跡出土の遺物(3)
第9図版	比丘尼平遺跡出土の遺物(4)
第10図版	比丘尼平遺跡出土の遺物(5)
第11図版	比丘尼平遺跡出土の遺物(6)
第12図版	比丘尼平遺跡出土の石器(1)
第13図版	比丘尼平遺跡出土の石器(2)
第14図版	比丘尼平遺跡出土の石器(3)
第15図版	比丘尼平遺跡出土の石器(4)

# 第1章 遺跡の概要

## 第1節 遺跡の位置と地形

本遺跡は米沢市万世町堂森字比丘尼平田540~554、字白山堂487・489~495番地他に所在する。米沢市内地から北東約3.1Kに位置する比丘尼平遺跡付近一帯は目前に標高311.2mの堂森山がそびえ、さらに東を望むと広大な八幡原工業団地、南に金谷部落をへて国道13号線、すぐ西側には羽黒川、北に接しては上谷地、竹井地区がうっそうとした林を境して隣接する間の水田地帯に立地している。遺跡は丁度、堂森山の西山麓から羽黒川によって形成された河岸段丘に分布し、南北420m・東西350mの範囲に広がっている。

比丘尼平遺跡一帯をなす基盤層は「旅籠層」と呼ばれる新第3紀中新世の軽石凝灰岩に浸蝕風化したシルト層や粘土層、砂利層等の沖積生堆積物が厚く堆積している。これらの堆積層は梓川扇状地形成段階において運搬されたものであり、本遺跡の地形は梓川扇状地の形成後に羽黒川が浸蝕して河岸段丘を形成した複合地形である。

## 第2節 調査に至るまでの経過

比丘尼平遺跡は昭和40年10月に実施された堂森山西側土地改良工事の際に偶然筆者によって土壙内に埋納する2個の古式土師器を発見したのが最初である。第2図は発見当時に作成した平面図である。簡単に概要を記すと黄褐色粘土層（地山）に多量の炭化物（木炭）が混入する土壙2が検出され、土壙の中央に完形土器が横倒した状況で古式土師器2点が埋納されてあった。土壙は両者とも橢円形プランを呈し、A土壙が長経95cm、短経73cm、深さ22cmを有し第3図2の壺形土器を埋納する一方、B土壙は長経72cm、短経62cm、深さ25cmを有し第3図1の壺形土器を同様に埋納してあった。特にB土壙内から検出された土師器壺形土器は頸部に円形状の突刺文を横走することから所謂『弥生式土器』の円形浮文のなごりを示す県内最古の土師器として注目されてきた。その後、八幡原工業団地造成計画が打ち出され、計画の大綱が決定した昭和48年には山形県教育庁文化課による周辺一帯の分布調査が実施され、45ヶ所の遺跡が発見確認された。この中で造成区域に係わる20遺跡は昭和49年7月から昭和51年3月の二ヶ年半を用いて緊急発掘調査を行なっている。本遺跡は工業団地区域外ではあるが、米沢駅東線30m道路予定地内に加わるとともに遺跡面積が5万m<sup>2</sup>以上にもおよぶことが明らかとなった。さらに最近では試掘調査の成果等により、北側にも分布していることが判明し、縄文前期を始め中期・同晩期・古墳前期・奈良平安期・中世の7時期が複合した約15万m<sup>2</sup>の大複合遺跡と推測されている。

## 第2章 比丘尼平遺跡の発掘

### 第1節 第Ⅰ次調査

#### 1) 調査の経過

米沢市の八幡原工業団地に通ずる駅東線幅30m道路が本遺跡上を横断することはすでに明確となっていた。しかし、あくまでも工事の施工は工業団地造成地内にとどまっており、全線開通の方向へとは相当の時間を要すとのことであった。ところが、工業用汚水の浄化を懸念した米沢市は昭和49年度から特定公共下水道管の埋設工事を着手する運びとなり、昭和53年度には前述の30m道路側面に埋設する計画が進められる様になった。道路工事に先行する埋設設計画は約700%の下水管の設営と工事道路を加えた5m幅が工事面積となり、本遺跡に係わる1,150m<sup>2</sup>（5m幅×230m）を対象とする緊急発掘調査が急務となった。米沢市都市計画課は米沢市教育委員会との協議の上、調査主体を教育委員会、調査担当にまんぎり会（会長手塚 孝）・調査及び調査総括を置賜考古学会（会長橋爪 健）に要請し、3者との協議の結果、昭和53年10月27日～同年11月8日の日程で発掘調査を実施することにした。

発掘調査は下水道工事に係わる全長230m・幅5mの1,150m<sup>2</sup>の範囲が調査対象となるが、路線と現場の状況から2.5m単位のグリットを基本とした。グリットは水路のセンターを基本線として設定し、東よりⅠ区・Ⅱ区・Ⅲ区と三段階に調査区を配した。

遺構はⅠ区～Ⅲ区の全域に分布することが確認されたが、期間的な制約より特に主要遺構が検出されたⅢ区を中心に実施せざるを得なかった。

最終的な精査面積はⅠ区250m<sup>2</sup>・Ⅱ区285m<sup>2</sup>・Ⅲ区596m<sup>2</sup>の計1,131m<sup>2</sup>である。

#### 2) 検出された遺構

方形周溝墓2基を含む竪穴住居跡1棟、掘立建物跡1棟、土壙3基、それに不明な溝状遺構3基と柱穴群等50基の遺構が検出している。ここではⅢ区の主要遺構を中心に述べたい。

：方形周溝墓〔第5図・第6図〕

Ⅲ区の拡張区より1号方形周溝墓と2号方形周溝墓の2基が検出されている。この中で2号方形周溝墓は道路予定地内に加わることで今後の調査に残し、1号方形周溝墓のみを調査して記録にとどめた。従って1号方形周溝墓を主に説明を加えると幅90cm～130cm・深さ10cm～70cm位の溝が方形状に区画するもので、東南コーナー部がブリッヂ状の空間（切れる）を有するのを特徴とする。同じ様に東南を除く三コーナー部も極端にすばまる特質があり、この部分だけは溝幅が40cm～50cmと細くなっている。主軸長が東西12.44m・南北長が10.9mをなし、ほぼ真北を示して

いる。溝の形状は二者に分類され、北溝及び東溝は土壙状の穴を順次移行する方法で溝を構築しているが、南面溝と西溝に関しては短い溝を数回掘り下げる手法を用いている。

遺物は第6図に示した通り、南北東西各溝内から計4点の土師器が検出している。図化した4点の土師器の他にも北溝を中心に78点の土器片が認められた。

上部プランの一部が確認された2号方形周溝墓であるが、コーナー部からの推測径では一辺6m・幅40cm~60cmを有するものと考えられる。

#### ：豊穴住居跡〔第5図・第7図〕

Ⅲ区のG3~6-B~F区にかけて検出したものである。壁面はすでに土地改良工事の際に破壊され、北側で3cm~4cm、南西側で1cm~2.5cmを残すのみである。だが周溝は7cm~11cm幅で明瞭に存在しており、この周溝からの推測では長径5.7m・短径5.4mの豊穴住居跡であったものと考えられる。炉跡は住居北側面に地床炉として残存し、柱穴はP1~P4の4本を住居跡のコーナー部付近に配している。大きさは22cm~28cmで深さ85cm~92cmと深い。他にも住居跡内からはP5~P16の12基が認められているが、埋土の状況と全体的に浅いことからみて縄文期のものと推定したい。一方、住居跡の南壁中央に長径90cm・短径80cmの1号土壙が付随し、内部には多量の木炭とともに完形の壙1点と甕形土器1点が検出しており、住居跡に併うものとみる。

遺物は住居跡の床面からも認められており、土師器壙1点・器台3点がある。この中で第10図5の器台は二重口縁をなす朱塗器台であり注目される。年代は方形周溝墓と同時期の塩釜I式に併行する。

#### ：土壙〔第5図・第6図〕

先述した1号土壙を含め4基検出している。2号土壙、3号土壙は2号方形周溝墓付近及び同遺構に切られて存在するもので、円形プランを有する深い掘り込みをなし2号土壙は長径100cm・短径97cm・深さ65cm、3号土壙は長径110cm・短径100cm・深さ40cmで何れも自然堆積状況を示す。遺物は認められなかった。4号土壙は1号方形周溝墓の南溝に切られた円形プランの深い掘り込みを呈するものである。内部からは縄文晩期の土器片第9図12~20他15点が認められた。

#### ：掘立建物跡〔第5図・第8図〕

I区・II区を含む調査区全域に掘立建物跡と推測される柱穴が分布するが、建物跡として確認に至ったのはⅢ区の1号掘立建物跡1棟のみであった。1号掘立建物跡は東西長の建物跡で東西桁行3間(8尺)、南北梁行2間(7尺)を有し、四方に4尺等間隔の廂をなす。柱穴の掘り方はTY16を除くと25cm~45cmの円形もしくは楕円形プランを示し、9cm~10cm位の柱痕跡(3寸角)が認められる。柱穴の深さは確認面からで12cm~30cmであり、廂を含めたすべての柱痕跡は角柱であった。遺物はTY19の柱穴内より第10図7の内黒土師器环片が検出しており、1号掘立建物跡の年代に近いものと考えられる。年代的には筆原遺跡のⅢ期(8世紀末葉)に共通する特徴を

示している。

### 3) 検出された遺物

第1次調査で検出された遺物はⅢ区の遺構内を主に628点ある。年代的には縄文・古墳・奈良・平安の3時期に大別されるが、ここではさらに細分して述べたい。

#### ：縄文時代の遺物〔第9図・第13図～第16図・第36図1・2〕

縄文時代に属する遺物は4号土壙内出土土器を除く他はすべて、1号方形周溝墓及び1号住居跡等の遺構内に混入していたものと表土内に含まれていたものである。それらは石器群と土器群とに分けられる。

#### 土器〔第9図1～22・第36図2・3〕

年代的に分類すると次の2類に分けられる。

##### a類土器〔第9図1～5〕

縄文前期初頭に位置する土器類で1はRLの三本多条による斜縄文、2・5は撚糸文、4は4本多条による羽状縄文片、3はLRの斜縄文片となり、3を除く他には胎土に多量の纖維を含んでいる。焼性は全体的に悪く、他に6点検出した。

##### b類土器〔第9図6～20・第36図1・2〕

縄文晩期に属する一群である。12・13・15・16・19・20と第36図1は4号土壙内から検出された同一個体の鉢形土器の破片であり、地文となるLRを全面に施した後に口縁部を主体に多条沈線文を加えている。6～8・10・11は沈線及び凹線を横走させた壺形、小形鉢形土器の口縁部片であり、これらは大洞C<sup>2</sup>～A式に併行するものである。

#### 石器〔第13図～第16図〕

前述の土器群の様にⅢ区の遺構を主に検出している。石器の大半はチップ・フレーク等の剥片が多く86点の石器のうち形態の明確なものは僅か5点であった。以下簡単に触ると1は主要剥離をa面に呈する二等辺三角形状の尖頭形石器である。2は基部が欠損した尖頭形状の石器、3は基部もしくは刃部両面に主要剥離をもつ範状石器、4は先端が欠損した石錐、5は先端のツマミが欠損した石匕であり、刃部が直角を有する三角形状の石匕は縄文前期の特徴であり、先のa類の土器類と同時期とみられる。7・8は縁片部に主要剥離を有する欠損断片であり、強いて言えば鉈状石器もしくは打製石斧の欠損品であろう。8は縁片に使用痕を呈する剥片で、9・14は厚味を帯びたやや大形の尖状を示す石器であり、縁片に難な剥離をなす。16・19は台形状を有する石器であり、縁片に主要剥離をもつ。他はすべて剥片であり、主なものを図化した。

#### ：古墳時代の遺物

Ⅲ区の1号方形周溝墓と1号竪穴住居跡からのみ検出されている。今回の発掘調査で発見された完形一括土器は10個体分で、後述するⅡ次調査、Ⅲ次調査でも古墳前期に属する遺物は検出さ

れなかった。従って比丘尼平遺跡での最大の成果でもある方形周溝墓の問題とも合せ、本項中で具体的な土器群の分析を行うことにしよう。また筆者らが昭和40年に検出した2個の土器も含め分類すれば、次の様になる。

#### a類土器〔第3図・第10図・第11図・第12図〕

壺形を有する土器群を一括した。器形と調整手法により次の3類に分けられる。

##### a'類土器（第3図1）

頸部が垂直に立ち上り、口縁部がほぼ直角に横に開くのを特徴とする。口唇部も同様に直角気味に横走し、内部が僅かに凹むことから丁度円弧状を呈する。胴部は最大径を胴上半位に置き、球形を有しながら底部にかけて急速に下傾する。調整手法は外面調整として胴部を横位及び斜位のハケメを全面に施し、後に底面から胴部下半にかけてヘラミガキ継による単調整、頸部直下、胴部最頂部にかけて「カヤ」のふしを工具とした突刺文（列点文）を横に一走している。最後に口縁部から頸部を横位のナデで仕上げている。内部調整は外部に比べ単調であるが、ミガキ、ヘラナデを主に底辺近くにハケメ、口縁部にナデを用いる。この種の器形は明確にないにしても横に直角に張り出す口縁部の特質は東海地方の古式土師器に多くみられる所謂「パレス型」の影響を有するものと考えられ、突刺状の列点も関東地方を主体にした円形浮文が変形したものとも理解することも可能であり、県内最古の土師器群として位置付けられよう。

##### a''類土器（第12図1）

頸部以下胴部全体はa'類土器と同様であるが、口縁部の立ち上りが斜状をなし、口唇部も斜位に曲することで直角を意図している。よって内面はゆるやかに立ち上り、僅かに口唇内部を内曲するために口唇部先端は尖状になる。基本的にはa'類の特徴と類似することから年代的な相異はないと考えられる。外面調整はハケメを主に施し、口縁部は横位のナデを有する。内面調整は頸部から口縁部付近と下胴部から底部にかけてハケメを用い、胴部はヘラナデを呈する。

##### a<sup>3</sup>類土器（第11図2）

頸部が垂直に立ち上り口縁部がゆるやかに外反する二重口縁の本類は器壁が厚く、胴部が球形状を有するのを特徴としている。胴部以下は残念ながら欠損しているが、強いて復元すると第9図版2の様になる。調整は内外面ともに口縁部をナデ横、胴部をヘラミガキの継位を主にしているが内面の頸部と胴部の一部にハケメ調整を行っている。

#### b類土器（第3図2・第11図1）

壺形を呈するものを一括した。昭和40年に発見された第3図2と1号方形周溝墓の北溝内から検出した第11図1の2点がある。前者をb'類とすれば先のa'類と同じく底部が極端に小さいのを特徴とし、胴部が細長のたまご状を呈する。頸部から口縁部に移行する曲線は垂直的に立ち上り、かつ曲線を描く様に外反するのを特徴としている。調整は外面調整を微細なハケメを斜位から継位

に施し、頸部から口縁部は横位のナデで調整している。内面は上より口縁部を横のヘラミガキからナデ、頸部は丹念に縦位の連続したヘラ調整、胴部の大半は弱い横位のナデと縦位のヘラナデを用い下胴から底辺部にかけては斜位と縦位の弱く微細なハケメ調整を行なっている。

後者の壺形土器はこれまでの壺形・壺形土器に共通していた小さな底部とは異って大きく、胴部全体が球形に近い特徴をもつ。直に立ち上がる頸部も僅かとなり「く」状に外反する口縁部も貧弱である。調整は内外面ともにハケメを基本とし、口縁部にナデの一部を残す程度である。また底部縁片の調整としてヘラケズリ・ヘラ調整を加え、器壁が薄いのも本類の異った所でもある。

#### c類土器（第12図2）

口縁部から胴上部にかけての約3分の1が存在する。胴部から口縁部にかけてゆるやかに内傾する本類はおそらく瓶の可能性が高い。外面調整をハケメ→ヘラ調整→口縁部のナデ横と施し内面調整はヘラ調整横を主に僅かに口縁部にナデ横をもつ。

#### d類土器（第10図2・4・5）

器台を一括した。何れも破片を復元したもので、推定器形を図化したものである。器形的にはd'類とd''類の二者に分けられる。

#### d'類土器（第10図2・4）

2は環部と脚部上半位、4は環部分しか存在しない。調整手法はヘラミガキを主体にし、2の脚部内面にシボリをもつ。器形は2から考えると口縁の開く環部に短脚の脚部が開き気味に斜傾するものと推測する。

#### d''類土器（第10図5）

二重口縁の環をもつ器台である。脚部には2単位の有孔を呈し、脚底辺は外反気味に曲するものと考えられる。内外面ともに赤褐色の朱を彩色し、調整は環の内外面を横位と縦位のヘラミガキ及び口唇部に横位のナデ、脚部は丹念な縦位のヘラミガキを外面調整とし、内面は斜位と縦位のハケメを施している。

#### e類土器（第10図1・3）

堆を本類とした。2点検出しており、1は大きく口縁部を開き、胴部は小さくて球形状を示し口縁部と胴部の境に一条の深い沈線状の凹で区画するのを特徴とする。2は口縁が欠損しているが1と同じ様な器形を示すものと推測する。ただし、胴部は1と比べるとつぶれた様に横に張り出し、底部に円形の凹を有している。調整はハケメを中心に施し、1に関しては外面の底辺部をヘラ調整、内面もヘラナデを口縁部に配し、胴部はヘラ調整とヘラミガキとで構成している。

#### f類土器（第10図6）

小形土器である。内外面ともマメツが著しく明確に言えないが、口縁部はナデ、胴部はヘラミガキを有し、外面の底辺部をヘラ調整で仕上げている。

### ：奈良・平安時代の遺物（第10図7）

昭和40年の土地改良工事によって地山層近くまで剥離していることもあって、遺物は極めて少ない。Ⅲ区1号掘立建物跡柱穴内から出土した第10図7の内黒土師器壺1点と板目状タタキ目を施す須恵器甕片が3点検出したにすぎない。

### 4) 小 結

下水道管理設工事と言うごく限られた範囲の発掘調査ではあったが、県内初の方形周溝墓2基や角柱を有する四面廂の建物跡を確認するなど予想以上の成果を上げることができた。とりわけ古墳前期の方形周溝墓は古墳成立に重要な役割を有すると言われるだけに注目され、隣接して発見された竪穴住居跡の存在は集落跡を構成する中で住居群と墓制との位置関係を知る上で重要な資料になろうし、少なくとも県内南部（米沢盆地周辺）では4世紀前半段階において、古墳発生の基盤が確立する方向に進んでいたことは明らかである。また今回は遺物しか認められなかった縄文期に関しても集落を構成していただろうし、奈良時代の建物跡は八幡原N030・31遺跡に大集落跡を構成していたことはすでに確認されており、関連性が求められる。

## 第2節 第Ⅱ次調査

### 1) 調査の経過

Ⅱ次調査は米沢駅東線道路の南側面に付随する水田用水路取り付け工事に係わる緊急発掘調査として実施したもので、道路施工で生じた水田区画に接する水田排水路部分1.5m×140mの範囲が調査対象となった。発掘調査は米沢市都市計画課、米沢市教育委員会の要請でまんぎり会（会長 手塚 孝）があたることになり、発掘で得られた成果は後に開始される道路部分の第Ⅲ次調査で一括して報告することで一致した。調査は調査の範囲が小規模に限定されることから特にグリットは設定せずに重機を用いて、表土を除去し、遺構が検出された箇所のみを精査し記録にとどめることを基本に進めた。調査は昭和54年4月16日～同年4月22日の7日間で、精査面積は130m<sup>2</sup>である。なお、精査区域の部分については第17図に示した様に5m間隔を基本にしたA区～M区の13区に区画した。

### 2) 検出された遺構（第17図）

調査範囲が狭いこともあり、遺構全体が明確にできる資料は得られなかったが、方形周溝墓1基と掘立建物跡2棟・小ピット30基・土壙2基・溝状遺構1基・浅い大形土壙状遺構1基の計41基がA区～M区にかけて検出された。詳細は第17図を参照願い、代表的な遺構について述べる。

#### ：方形周溝墓

K区～M区にかけて認められた。調査範囲が限定しているため全容を把握することは不可能であったが、西溝と北溝の状況から推測すれば一辺5m位を有する方形周溝墓と考えられる。溝の幅は58cm～100cm・深さ15cm～30cmをなす。遺物は西溝の底面より土師器底部1点と胴部破片3

点出土している。

#### ：掘立建物跡

F区とL区の二箇所から確認された。先に触れたピットも柱穴の一部と考えられるが、明確には出来なかった。先のF区をⅠ次調査にならって2号建物跡とすれば東西方向に2間の柱間が認められ、間尺は4尺(120cm)であった。

L区検出の3号建物跡も2間のみで、3号方形周溝墓を切って存在する。間尺が8尺(240cm)を有し、20~28cmの掘り方に15~18cmの柱痕跡が認められた。

#### 3) 検出された遺物

Ⅱ次調査で発見された遺物は石器2点・土器片4点の計6点のみである。石器はB区とG区の遺構外からの検出で綾長の剝片(第15図16)と石錐状石器(第13図3)がある。土器片は先述した通り、3号方形周溝内からの出土であり、古墳前期の塙釜式併行の壺形土器底部片と同じ胴部破片からなる。

#### 4) 小 結

今回の調査は小規模な範囲に限定されたこともあり、明確な遺構・遺物の検出は少なかった。しかし方形周溝墓の発見は、すでに第Ⅰ次調査にて2基が確認されていることも考慮すれば今後さらに多くの方形周溝墓、住居跡群の存在が指摘されよう。さらに第Ⅰ次調査同様に今回の調査範囲には歴史時代の遺構、特に掘立建物跡が分布する範囲が予想外に拡大していると推測されよう。年代的には奈良・平安時代と考えられるが柱穴の大きさが非常に小規模なことから中世に属するものも含まれているものとみられる。

### 第3節 第Ⅲ次調査

#### 1) 調査の経過

第Ⅲ次の発掘調査は遺跡範囲に係わる全長240m・幅30mの「米沢駅東線」路線敷のうち、既に発掘調査が終了した第Ⅰ次調査・第Ⅱ次調査を除く、残り5,640m<sup>2</sup>を対象に、昭和62年8月3日~同年9月30日までの約2ヶ月の予定で発掘調査を実施した。調査は第18図に示した様に先のⅠ次・Ⅱ次調査の間を埋める様に8m×8mのグリッドを一単位にする。基本方位を真北設定した東西長のグリッドは調査の都合上G9~34-11-18の12区をA区、G35~58-11-18の12区をB区と仮に区別し、平行して進める方法を取った。A区及びB区の精査範囲は重機による表土剥離前に排水溝の設定と遺構密集地を把握する試掘調査を先行して進め、遺構が認められなかった東端の30m、第Ⅰ次調査後に施工された下水道管理設工事によって破壊された西側114mを除いた96mを指し、残念ながら後日の調査で確認するはずだった2号方形周溝墓及びその周辺は跡形もなく失われていた。さて、調査の進行はA区とB区で若干異なるが、重機の表土剥離を8月4

日から開始し8月10日の5日間を要し、面整理を平行して8月4日から行い、同8月19日からは精査・遺構確認、9月1日から確認遺構の掘り下げを実施し、9月15日からはセクション図の作成と平板測量に入り、9月22日に写真撮影を行って、9月25日にはほぼ調査を完了。最終的な精査面積はA区768m<sup>2</sup>、B区704m<sup>2</sup>の計1472m<sup>2</sup>となる。

ちなみに第Ⅰ次調査から第Ⅲ次調査までの調査面積と精査面積を列挙すれば次の様になる。

- 調査面積 第Ⅰ次調査 1,200m<sup>2</sup>、第Ⅱ次調査 360m<sup>2</sup>、第Ⅲ次調査 5,640m<sup>2</sup> 計 7,200m<sup>2</sup>
- 精査面積 第Ⅰ次調査 1,131m<sup>2</sup>、第Ⅱ次調査 130m<sup>2</sup>、第Ⅲ次調査 1,472m<sup>2</sup> 計 2,733m<sup>2</sup>

## 2) 検出された遺構

ここではA区・B区を一括して述べることにする。検出された遺構としては掘立建物跡4棟を含め、柱穴状小ピット（掘立建物跡内の柱穴を含む）179基、風倒木壙3基となる。

：掘立建物跡〔第27図・第28図・第29図〕

調査区全体が昭和40年度の土地改良工事の影響によって遺構確認面が剥られており、明らかに掘立建物跡とみられる柱穴が存在するのにもかかわらず組み合せが不明なものも少なくない。このことは、浅い柱穴が失なわれたとみるべきであろう。以下はからずも確認された4棟の建物跡について説明を加えたい。

BY 1 (第27図)

B区のG35-38-11-14にかけて検出した。主軸長を南北に示す2間×2間の建物跡は桁行7尺、梁行5尺を有し、方位はN-30°-Eである。

BY 2 (第28図)

A区のG22-24-14-16にかけて検出した。東西長の1間×2間の建物は東西14尺、南北5尺を計る。柱穴の掘り方は20cm～30cmの円形でTY122に10cmの柱痕跡が認められた。

BY 3 (第28図)

先のBY 2を横断してほぼ東西方向に2間認められた。間尺は7尺(211cm)をなす。

BY 4 (第29図)

真北から僅かに東に3°傾くBY 4の建物跡は東西桁行3間(6尺×7尺×6尺)、南北梁行3間(5尺・4尺・5尺)の東西長の建物である。柱穴は破壊を受けていることもあるて部分的に失っている。柱の掘り方は約20cmの円形を示す。

：柱穴群(第30図～第35図)

すべて柱穴にするには問題もある。長径15cm～45cmで20cm前後のものが大半を示す。これらの柱穴(小ピット)の埋土の状況からすると縄文期に属するものも存在するとみられる。詳しくは第1表を参照願いたい。

第1表 第Ⅲ次調査柱穴計測表

測定No.	遺跡名	出土地区	形	状	長径	短径	深さ	備考	測定No.	遺跡名	出土地区	形	状	長径	短径	深さ	備考
1	TY12	G22-16	不整円形	24.0	20.0	8.0		61	TY90	G32-12	不整円形	15.0	15.0	6.0			
2	TY10	G22-15	不整円形	28.0	25.0	3.0		62	TY99	G32-14	不整円形	18.0	16.0	3.0			
3	TY12	G21-15	円形	21.0	18.0	4.0		63	TY12	G32-14	不整円形	22.0	20.0	8.0			
4	TY13	G22-13	円形	19.0	19.0		未発掘	64	TY78	G34-11	不整方形	17.0	12.0	8.0			
5	TY10	G20-14	不整方形	35.0	30.0	15.0		65	TY10	G34-11	格円形	30.0	22.0	18.0			
6	TY10	G20-14	格円形	17.0	13.0	9.0		66	TY10	G11-15	格円形	18.0	13.0	10.0			
7	TY10	G20-14	円形	17.0	16.0		未発掘	67	TY10	G12-15	不整円形	14.0	13.0	12.0			
8	TY10	G20-14	円形	18.0	16.0		145.0(140.0± 5.0)未発 掘	68	TY10	G13-15	不整円形	16.0	16.0	15.0			
9	TY10	G20-14	円形	15.0	15.0			69	TY10	G13-15	不整円形	16.0	15.0	13.0			
10	TY10	G22-11	円形	17.0	16.0	15.0		70	TY10	G15-17	円形	17.0	17.0	12.0			
11	TY10	G22-11	円形	23.0	22.0	2.0		71	TY10	G15-17	格円形	15.0	13.0	10.0			
12	TY10	G22-14	不整円形	22.0	20.0	30.0		72	TY10	G14-15	格円形	25.0	17.0		未発掘		
13	TY10	G22-14	格円形	30.0	25.0	8.0		73	TY10	G14-15	不整円形	22.0	15.0		未発掘		
14	TY10	G24-15	不整円形	23.0	19.0	15.0		74	TY10	G14-15	円形	21.0	22.0		未発掘		
15	TY10	G25-17	不整椭円形	30.0	20.0	23.0		75	TY10	G14-15	円形	25.0	23.0		未発掘		
16	TY10	G25-16	不整方形	22.0	20.0	20.0		76	TY10	G14-14	円形	17.0	17.0	14.0			
17	TY10	G24-15	円形	24.0	24.0	30.0		77	TY10	G14-14	格円形	22.0	20.0	21.0			
18	TY10	G26-17	格円形	20.0	18.0	7.0		78	TY10	G12-13	不整円形	23.0	17.0	5.0			
19	TY10	G26-14	円形	18.0	18.0	7.0		79	TY10	G13-13	格円形	18.0	15.0	5.0			
20	TY10	G26-14	円形	15.0	14.0	20.0		80	TY10	G11-14	円形	16.0	16.0	5.0			
21	TY10	G23-13	格円形	24.0	19.0	10.0		81	TY10	G14-11	円形	24.0	23.0	23.0			
22	TY10	G24-13	格円形	20.0	17.0	12.0		82	TY10	G11-12	格円形	20.0	15.0	20.0			
23	TY10	G24-13	格円形	26.0	20.0	15.0		83	TY10	G17-16	円形	15.0	15.0	6.0			
24	TY10	G23-14	不整円形	17.0	15.0	25.0		84	TY10	G16-16	円形	25.0	24.0		未発掘		
25	TY10	G27-26-11	不整円形	25.0	22.0	20.0		85	TY10	G16-16	不整円形	18.0	16.0		未発掘		
26	TY10	G24-11	円形	17.0	17.0	3.0		86	TY10	G16-16	円形	19.0	19.0	10.0			
27	TY10	G27-14	不整三角形	30.0	18.0	22.0		87	TY10	G16-16	方形	21.0	19.0	8.0			
28	TY10	G28-15	不整椭円形	32.0	15.0	7.0		88	TY10	G16-15	不整円形	25.0	23.0	7.0			
29	TY10	G27-11	方形	15.0	15.0	13.0		89	TY10	G16-15	不整円形	30.0	23.0	9.0			
30	TY10	G27-10	不整円形	15.0	12.0	13.0		90	TY10	G15-15	円形	18.0	17.0	6.0			
31	TY10	G29-11	円形	15.0	14.0	4.0		91	TY10	G15-15	格円形	20.0	14.0	10.0			
32	TY10	G29-15	格円形	22.0	15.0	5.0		92	TY10	G22-16	不整方形	23.0	20.0	12.0			
33	TY10	G28-13,12	不整円形	15.0	13.0	5.0		93	TY10	G22-15	格円形	33.0	25.0	20.0			
34	TY10	G30-11	円形	14.0	14.0	9.0		94	TY10	G23-15	円形	28.0	27.0	9.0			
35	TY10	G30-11	不整円形	15.0	14.0	9.0		95	TY10	G21-15	不整円形	35.0	28.0		未発掘		
36	TY10	G27-28-14	方形	17.0	15.0	9.0		96	TY10	G15-16	円形	16.0	16.0	8.0			
37	TY10	G29-13,14	小整方形	17.0	14.0	20.0		97	TY10	G19-17	格円形	25.0	19.0		未発掘		
38	TY10	G30-13	方形	12.0	12.0	8.0		98	TY10	G21-18	円形	18.0	18.0	3.0			
39	TY10	G28-12	不整円形	17.0	15.0	7.0		99	TY10	G32-15	不整方形	29.0	17.0	20.0			
40	TY10	G28-12	不整円形	20.0	18.0	5.0		100	TY10	G32-15	格円形	23.0	16.0	8.0			
41	TY10	G32-13	不整椭円形	20.0	16.0	3.0		101	TY10	G31-17	不整円形	21.0	18.0	7.0			
42	TY10	G32-13	円形	22.0	22.0	23.0		102	TY10	G33-15	不整円形	22.0	20.0	7.0			
43	TY10	G32-13	円形	17.0	14.0	17.0		103	TY75	G36-18	不整円形	25.0	23.0	14.0			
44	TY10	G32-12,13	円形	20.0	20.0	17.0	87が88をさす	104	TY10	G36-17	円形	23.0	22.0	19.0			
45	TY10	G31-32,12,13	不整円形	32.0	29.0	20.0		105	TY10	G36-16,17	円形	20.0	21.0	7.0			
46	TY10	G31-32-13	不整円形	13.0	13.0	14.0	93が92をさす	106	TY10	G37-15,16	円形	16.0	16.0	9.0			
47	TY10	G31-32-13	不整円形	20.0	19.0	14.0		107	TY10	G37-16	不整円形	25.0	19.0	14.0			
48	TY10	G31-13	円形	18.0	17.0	5.0		108	TY10	G35-17	不整椭円形	72.0	40.0	33.0			
49	TY10	G31-12	円形	13.0	12.0	4.0		109	TY53	G38-14	不整円形	18.0	15.0	11.0			
50	TY10	G31-14	方形	18.0	16.0	10.0		110	TY10	G37-11,12	円形	20.0	20.0	12.0			
51	TY10	G31-14	不整円形	18.0	15.0	6.0		111	TY10	G37-18	円形	14.0	14.0	14.0			
52	TY10	G31-14	不整円形	20.0	19.0	13.0		112	TY10	G37-12	不整円形	22.0	22.0	7.0			
53	TY10	G34-12	不整円形	14.0	13.0	7.0		113	TY10	G37-12	格円形	29.0	12.0	7.0			
54	TY10	G34-12	不整方形	32.0	20.0	13.0		114	TY10	G37-12	格円形	20.0	17.0	8.0			
55	TY10	G34-12	格円形	21.0	18.0	10.0		115	TY10	G37-12	格円形	20.0	19.0	11.0			
56	TY10	G34-12	格円形	30.0	22.0	13.0	82が93をさす	116	TY10	G37-13	不整円形	16.0	12.0	6.0			
57	TY10	G34-12	不整円形	25.0	20.0	9.0	81が90をさす	117	TY10	G36-14	円形	14.0	14.0	4.0	未発掘		
58	TY10	G34-12	円形	18.0	17.0	9.0		118	TY10	G36-12	円形	15.0	15.0	9.0			
59	TY10	G34-11	不整円形	23.0	18.0	11.0		119	TY10	G37-12	格円形	25.0	20.0	12.0			
60	TY10	G32-12	不整円形	17.0	16.0	7.0		120	TY10	G36-37-11	不整円形	19.0	18.0	7.0			

通しNo	遺物No	出土 地 区	形 状	長径	幅径	深さ	備 考	通しNo	遺構No	出土 地 区	形 状	長径	幅径	深さ	備 考
12	TY70	G38-11	不整円形	25.0	24.0	14.0		13	TY29	G44-17	不整方形	30.0	17.0	7.0	
12	TY50	G38-13	不整円形	30.0	23.0	7.0		14	TY35	G43-15	不整円形	24.0	17.0	13.0	
12	TY51	G38-14	不整円形	17.0	15.0	5.0		15	TY37	G43-18	円 形	13.0	13.0	8.0	
13	TY52	G38-13,14	不整椭円形	25.0	17.0	11.0		16	TY30	G43-17	円 形	21.0	19.0	18.0	
15	TY55	G37-13	不整円形	19.0	15.0	5.0		16	TY34	G43-16	椭 圆 形	20.0	17.0	8.0	
16	TY58	G37-13	不整円形	23.0	20.0	20.0		16	TY22	G45-14	不整円形	21.0	18.0	9.0	
17	TY64	G36-12	方 形	23.0	12.0	9.0		17	TY20	G44-12,13	不整椭円形	35.0	43.0	35.0	
18	TY65	G36-12	椭 圆 形	16.0	13.0	6.0		18	TY21	G44-14	椭 圆 形	14.0	11.0	23.0	
18	TY59	G38-12	不整円形	23.0	23.0	7.0		19	TY23	G43-14	円 形	15.0	15.0	5.0	
19	TY44	G38-39-18	椭 圆 形	23.0	18.0	10.0		20	TY 7	G50-17	円 形	20.0	20.0	5.0	
19	TY38	G42-15	不整円形	14.0	12.0	10.0		20	TY 8	G47-15	不整円形	35.0	25.0	9.0	
20	TY40	G42-16	円 形	17.0	16.0	12.0		20	TY 2	G50-51-17	不整椭円形	40.0	30.0	19.0	
20	TY42	G42-17	円 形	17.0	17.0	5.0		20	TY 4	G50-17	不整円形	35.0	35.0	18.0	
20	TY41	G42-17	不整円形	20.0	18.0	18.0		20	TY 3	G50-17	不整円形	25.0	24.0	10.0	
20	TY39	G42-15,16	椭 圆 形	30.0	16.0	10.0		20	TY 6	G50-17	円 形	22.0	20.0	10.0	
20	TY43	G39-15	円 形	12.0	12.0	7.0		20	TY 5	G50-16	円 形	16.0	15.0	7.0	
20	TY45	G41-42-13	不整円形	18.0	17.0	6.0		20	TY 19	G47-13	椭 圆 形	23.0	14.0	10.0	
20	TY46	G41-12	不整椭円形	40.0	20.0	15.0		20	TY 17	G50-15	円 形	16.0	10.0	4.0	
20	TY48	G39-13	不整円形	25.0	22.0	5.0		20	TY 18	G49-14	椭 圆 形	14.0	11.0	10.0	
20	TY47	G38-13,14	円 形	14.0	14.0	未発掘		20	TY 16	G48-49-13	不整方形	75.0	47.0	17.0	
20	TY49	G41-14	不整円形	22.0	19.0	17.0		20	TY 1	G51-15	椭 圆 形	20.0	15.0	16.0	
20	TY27	G45-16,17	不整円形	17.0	15.0	7.0		20	TY 9	G51-32-15	円 形	25.0	25.0	24.0	
20	TY28	G45-17	不整椭円形	35.0	21.0	6.0		20	TY 10	G52-14	椭 圆 形	20.0	17.0	13.0	
20	TY25	G45-15	円 形	21.0	20.0	11.0		20	TY11	G51-12	椭 圆 形	17.0	15.0	16.0	
20	TY24	G45-15	円 形	20.0	20.0	11.0		20	TY12	G51-12	椭 圆 形	26.0	19.0	8.0	
20	TY26	G44-15	円 形	14.0	14.0	3.0		20	TY13	G51-12	円 形	28.0	27.0	43.0	
20	TY31	G44-15	不整方形	27.0	17.0	5.0		20	TY14	G51-12	円 形	20.0	20.0	43.0	
20	TY32	G43-15	不整円形	16.0	15.0	12.0		20	TY15	G51-12	円 形	15.0	15.0	15.0	
20	TY33	G43-15	円 形	12.0	11.0	8.0		20	TY16	G12-11	円 形	22.0	20.0	8.0	
20	TY36	G44-17	不整方形	24.0	20.0	7.0		20							

### ：風倒木塙〔第19図〕

風倒木塙はA区のG13～19-10～15を中心として3基認められた。不整の椭円形プランを示す自然造構は風倒木特有の縦位に層序が堆積しており、地山直上の暗黒褐色微砂質土から落ち込んでいることは、縄文期の可能性が高い。遺物の検出は認められなかった。

### 3) 検出された遺物

今回の調査で発見された遺物は耕作土及び遺構確認面（削平された遺構確認に残る後世の堆積層で土地改良工事の際に運ばれた土砂）からの検出であり、総数24点ある。すべて破片で占められ、おおまかに述べると石器・土器・陶磁器の三者に大別される。

#### 土器〔第36図3・4・8〕

縄文土器2点、土師器片8点、須恵器片4点の14点がある。先の縄文土器はLR単節斜縄文を有するものと、撚糸文を施すものとがある。前者の土器片は内面に炭化物が付着しており煮沸に用いられた鉢形土器とみられ、胎土の分析では前期の可能性がある。後者は胎土に多量の石英砂を混入し、撚糸の特徴から縄文晩期と考えられる。

土師器片も細片であり、明確な説明を加えるまでもないが、器形的には高环片2点、境の底部片1点、壺もしくは壺の胴部片5点となる。調整は外面にハケメ・ヘラミガキを呈するものが3点認められた。時期はすべて古墳前期の所産である。

須恵器片は壺が1点、壺の胴部片が2点（第36図3・4）、高壺の脚部1点（第36図8）となり、壺片は太状の板目をたたき目とし、押え目は円雕を有している。高壺の脚部は底部に回転糸切りの切り離しを残し、脚部の外面には暗緑色を呈する自然釉が付着している。器形的には高壺と推測したが、器壁の厚味を考慮すれば、むしろ壺形の可能性が高い。年代的には平安期に位置し、10世紀前後位と考えられる。

#### 陶磁器（第36図7・9・10）

中世陶器と近世陶器に大別される。前者には常滑系の大型壺破片1点と灰釉陶器壺（第36図10）1点、それに昭和60年8月にまんぎり会が発掘調査で確認した戸長里窯の「サヤ」鉢1点と壺の取手部分1点〔第11図版27・25〕、（第36図7）の4点がある。

後者の近世陶器は相馬系とみられる碗（第36図9）、鉢の2点に三田青磁1点が含まれる。

#### 石器〔第15図16、第13図3、第36図5・6〕

縦長の剥片（第15図16・17）4点と礫器（第36図5・6）2点が出土している。

#### 4) 小 結

第Ⅲ次調査区からは柱穴群を中心とした遺構群が調査全域に亘って確認された。調査以前に受けた破壊が著しく、失われた遺構も数多く含まれているものと判断される。

## 第3章 総 括

これまで比丘尼平遺跡における第Ⅰ次調査から最終年度の第Ⅲ次調査の成果について述べてきたが、ここでは検出された遺構・遺物を集約して触ることにしたい。

### 第1節 繩文時代

繩文時代の遺構としては第Ⅰ次調査で検出された4号土壙1基が唯一となる。これは丁度、道路にあたる部分の遺構確認面が破壊され、大半の遺構が失ったと考えるべきである。年代的には繩文時代の前期と晩期の遺構が認められているが、調査外の北側に繩文中期の遺物集中箇所もあり広範囲に亘って分布していたものとみられよう。

### 第2節 古墳時代

第Ⅰ次調査と第Ⅱ次調査で検出されたものであり、方形周溝墓3基、竪穴住居跡1棟と土壙4基が発見されている。Ⅰ次調査の竪穴住居跡は第2図版に示す様に住居床面まで重機のキャタピラの痕跡が明瞭に残っている如く、あと数センチ程深く重機が削っていたら、遺構の存在はもとより、遺物も失われていただろう。従って、繩文時代の遺構も含め、Ⅰ次～Ⅲ次調査で得られたおおよそ250基の柱穴群の中には柱穴だけが残存する竪穴住居跡も存在するだろう。3基の方形

周溝墓の分布状況から判断すれば、古墳時代の遺構は河岸段丘に沿って分布していたと推測される。ここでは米沢盆地における古式土師器と集落について述べてみよう。

### 1) 米沢盆地の古式土師器

米沢盆地から検出された古式土師器の遺跡は12箇所ある。最古の段階に位置する4世紀の土器群は米沢市の比丘尼平遺跡・大清水遺跡・柿の木遺跡、高畠町地獄岩遺跡、南陽市諏訪前遺跡と古墳からの検出による南陽市稻荷森古墳、川西町天神森古墳を含めた7遺跡、次のⅡ段階の5世紀に位置する土器群は米沢市八幡堂遺跡・ニタ侯A遺跡・上浅川遺跡、南陽市長岡山遺跡・沢田遺跡の5遺跡がある。

前者のⅠ段階の土器群は比丘尼平遺跡出土の土器群として位置付けⅠ段階のa類とする。a類の特徴は弥生式土器の特色を残し、壺形にみられる。「パレス」型は東海地方の影響を示す他、壺の凹線と底部に円凹を有するものは畿内を中心とした布留式の仲間とも共通する。同じa類でもやや下傾するものとして、高畠町地獄岩出土の壺や大清水遺跡の棒状浮文を有する壺形土器、堆付高环、それに方形周溝内から検出された壺形土器は色調、ハケメ調整の順位、器形から関東地方の五領式に共通し、下半部が失っているがもともとは台付壺であったと考えている。

次に4世紀の後半に位置する1段階のb類は大清水遺跡の住居跡内一括土器を代表として、他に柿の木遺跡1号住居一括土器・天神森古墳出土の長頸壺・稻荷森古墳出土の器台等が伴う。比丘尼平遺跡でみられたハケメ調整を行う壺はヘラミガキに変り、直角に立ち上る壺形、壺形は少なく、底部も大き目となり、胴部外面調整の大半を示していたハケメ調整に加え、底部から下胴部にかけヘラケズリ調整も多様に用いられる。

後者のⅡ段階の所謂「南小泉」式はここではあえて詳しく触れないが、前半に位置するa類と後半に位置するb類に細別されよう。Ⅱ段階a類には米沢市八幡堂遺跡・ニタ侯遺跡・南陽市沢田遺跡、Ⅱ段階b類には米沢市上浅川遺跡・南陽市長岡山遺跡等がある。

### 2) 集落跡と墓制

集落跡となると、極めて発見例が少ない。米沢市のみが例外で、他は南陽市沢田遺跡と諏訪前遺跡より竪穴式住居跡2棟検出しているのにすぎない。従って、米沢市発見の資料を基に述べると集落跡を構成するものとしては住居跡群を中心としたグループと古墳を除く、墓制とに分けられる。先の住居跡は大清水遺跡と柿の木遺跡を加えた一大集落跡であり、隅丸方形プランを主にした竪穴住居跡7棟と墓跡が併いた、掘立の建物跡(倉庫)1棟、それに方形周溝墓1基が加わって村を構成していたことが判る。このことは住居の数と墓制との比率、ことに方形周溝墓が当地方に導入されたⅠ段階a類からb類時期の状況を知る上で重要な意味を示すばかりではなく、Ⅰ段階a類期に属する比丘尼平遺跡からはすでに3基の方形周溝墓が発見されており、今後調査を進めれば方形周溝墓の数量も当然増加するであろうし、大清水遺跡の単位を仮にあてはめたとすれば3基で住居跡

数が21棟となり、もちろんそれ以上であるから本遺跡の15万m<sup>2</sup>の遺跡範囲は妥当であろう。またⅠ段階b類の時期には新たな墓制（古墳）が確立する。川西町天神森古墳（全長73m）、米沢市賓領塚古墳（全長70m以上）は明らかに4世紀段階の古墳であり、次のⅡ段階a類の時期からは方形周溝墓と古墳が共存する様になる。その代表が八幡堂遺跡とニタ侯遺跡である。ニタ侯遺跡は一応Ⅱ段階のa類期に属するが、土器群の一部には4世紀の特徴を呈するものも含まれている。このことは4世紀からの移行期、もしくは5世紀の早い段階の集落と考えることもできよう。堅穴住居跡は5棟発見され、丁度230m西に離れた八幡堂遺跡からは5基の方形周溝墓が検出されている。そして、両者の遺跡出土土器の分析から同時期、すなわちニタ侯A遺跡の墓制が八幡堂遺跡の方形周溝墓となる。この事実から言えることは少なくともⅠ段階での方形周溝墓の存在が政治集団の長のみが与えられた墓制の特権が古墳成立とともに解体し、共同墓地との性格に移行していた状況を示すものであろう。そしてⅡ段階のb類期になると首長の支配中に置かれた村々（集落跡）の長だけが一時的に方形周溝墓を与えられる。これが、一辺16mを有する大型の方形周溝墓上浅川遺跡の存在となり、付近に一般の墓制となる土壙が付随する。

以上のことから比丘尼平遺跡は米沢盆地の古墳発生の問題を知る上でも重要な意味を有し、隣接する八幡堂・ニタ侯・大清水・柿の木各遺跡とのさらに密接な係わりを追求して行きたい。

なお、米沢市内の方形周溝墓の分類と図面は第38図・第39図と第2表を参照されたい。

### 第3節 歴史時代

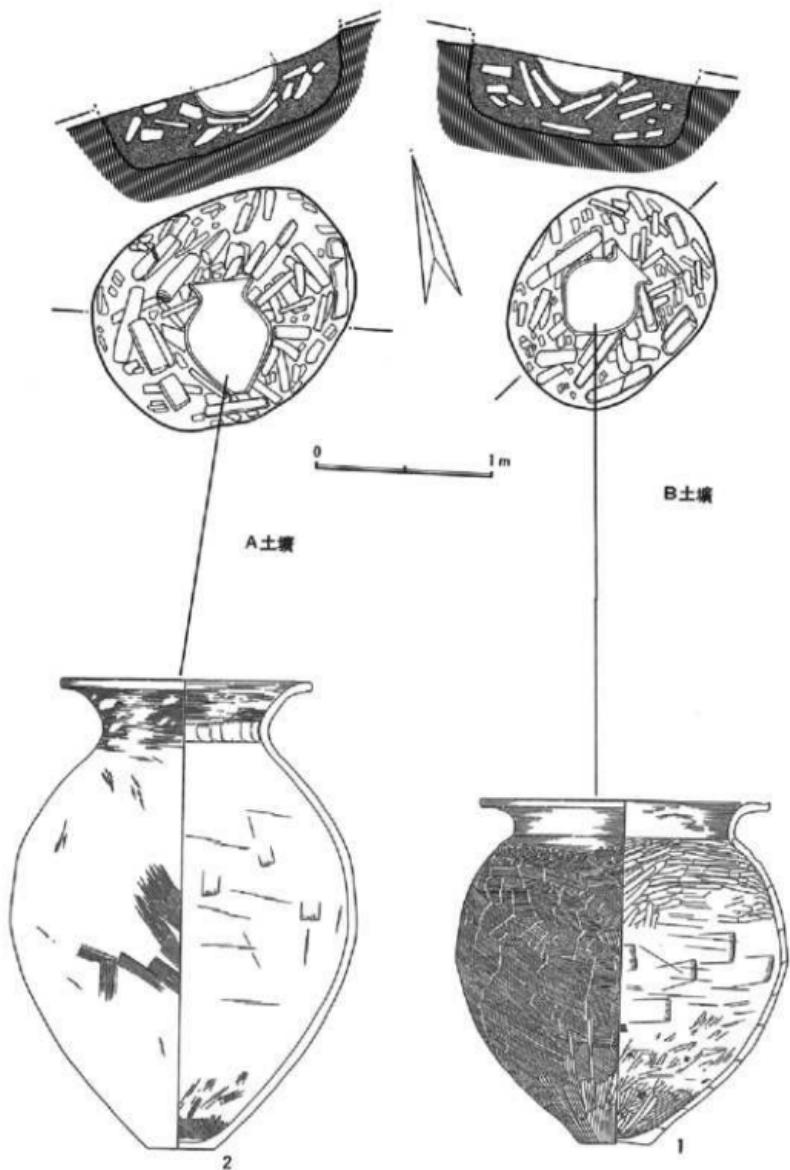
あえて歴史時代とした理由は、第Ⅰ次調査から今回の第Ⅲ次調査までに確認された7棟の建物跡の大半が年代決定を示す資料を得ていない点にある。250基の柱穴も以下同様であり、年代を示す遺跡は発見されなかった。

数少ない資料から断定すれば、奈良時代後葉期・平安中期・鎌倉期・安土桃山のいずれかに相当するはずである。建物跡の多くは非常に小規模で、同じ間数でも桁を短縮する手法は平安中期以降に多く用いられる。また本遺跡が比丘「尼」平と言うが如く、本遺跡の前に位置する堂森山の中腹には山腹を削り出した平坦部に比丘尼寺廃寺が現存する。遺跡の小字も比丘尼寺→平と変化したものと考えられる。地元ではとある京都の公家の姫君が長井氏の保護で当地に庵を築いた等々の伝承もあるが、文献資料や歴史的な確証がない現状では推測の域を脱していない。

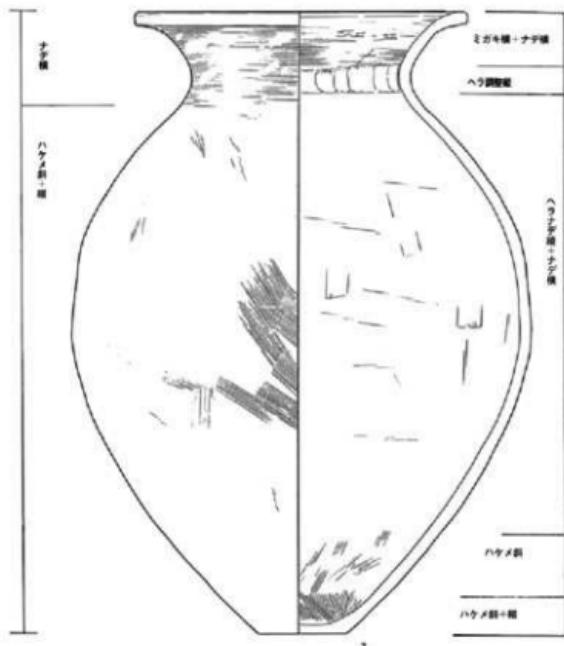
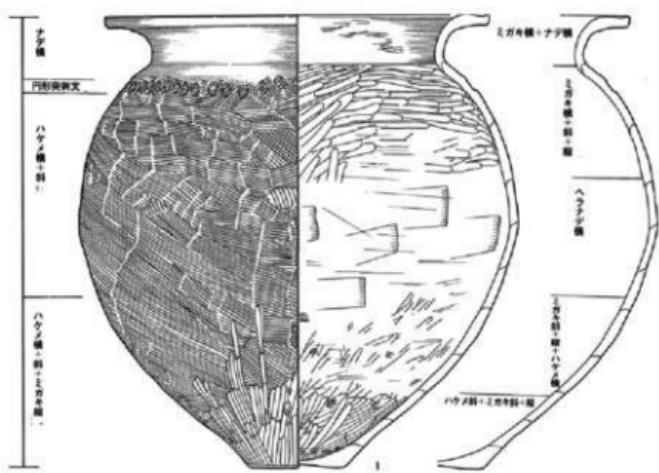
真偽は別にしても「比丘尼寺」廃寺とみられる遺構が当地に存在することは事実であり、この主要な寺（あえて尼寺とする）を中心に集落を構成したとすれば、大規模な中世期の建物群が存在しても不思議ではない。この点も考慮して、今後の比丘尼寺廃寺の発掘調査を期待して、それまでの課題としておこう。最後に比丘尼平遺跡の長き調査に協力を賜りました都市計画課・まんぎり会を初め関係機関・地元の方々に厚く御礼申し上げます。



第1図 比丘尼平遺跡付近の地形図

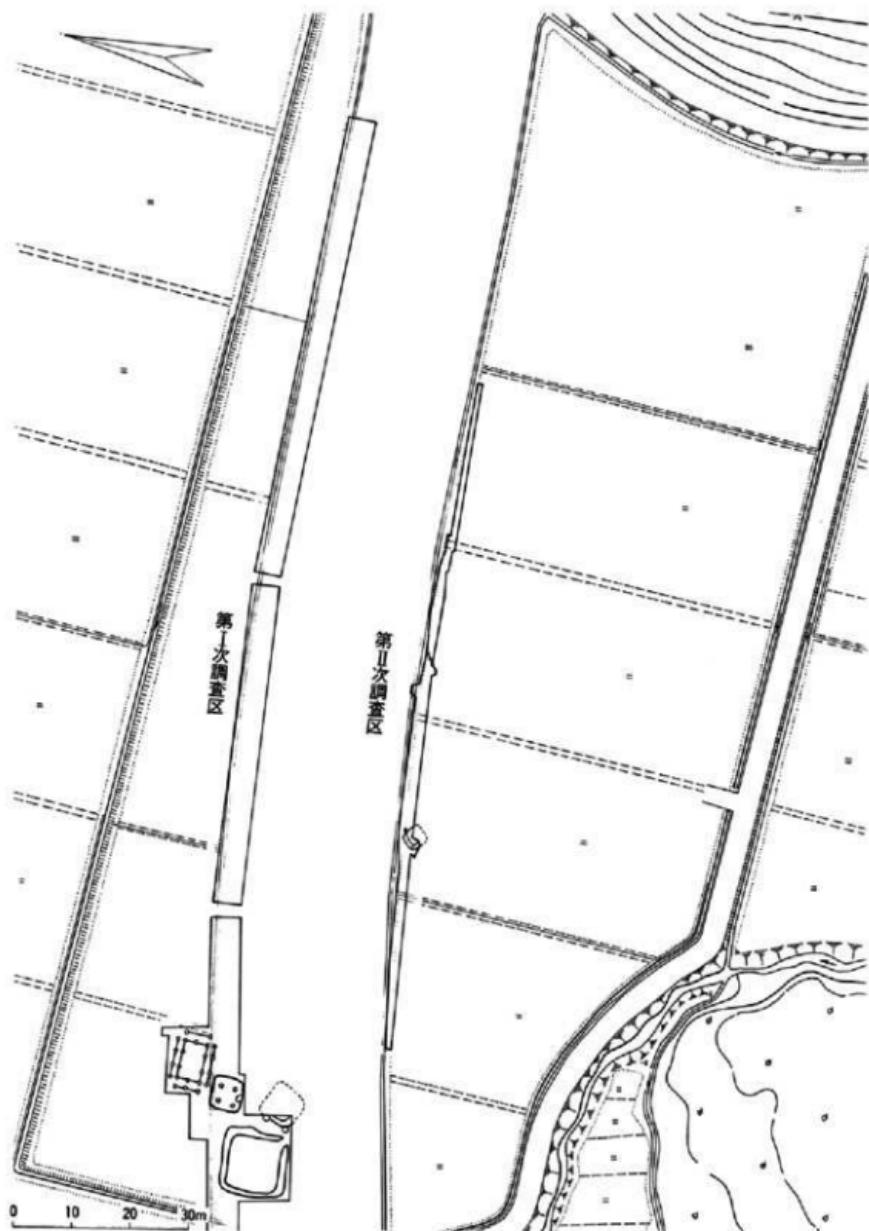


第2図 比丘尼平遺跡出土古式土師器実測図(1)

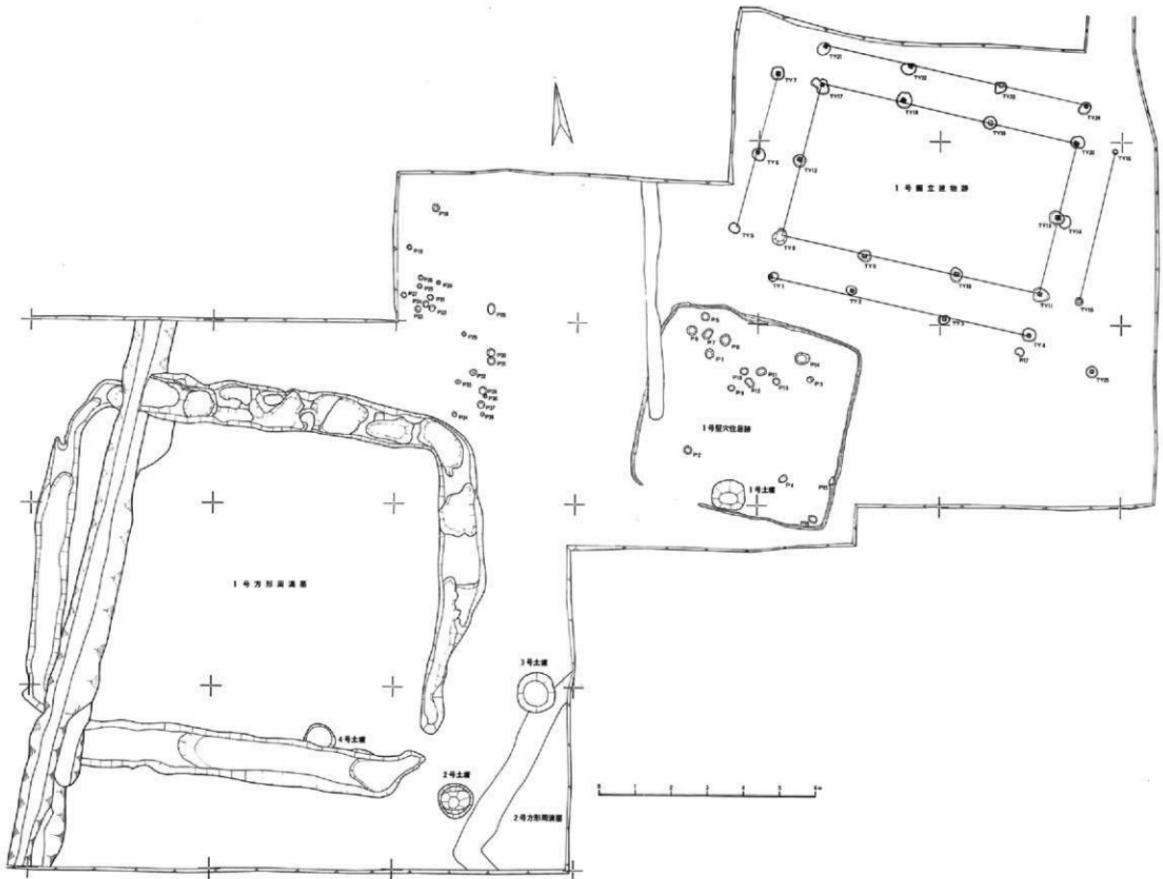


第3図 比丘尼平遺跡出土古式土師器実測図(2)

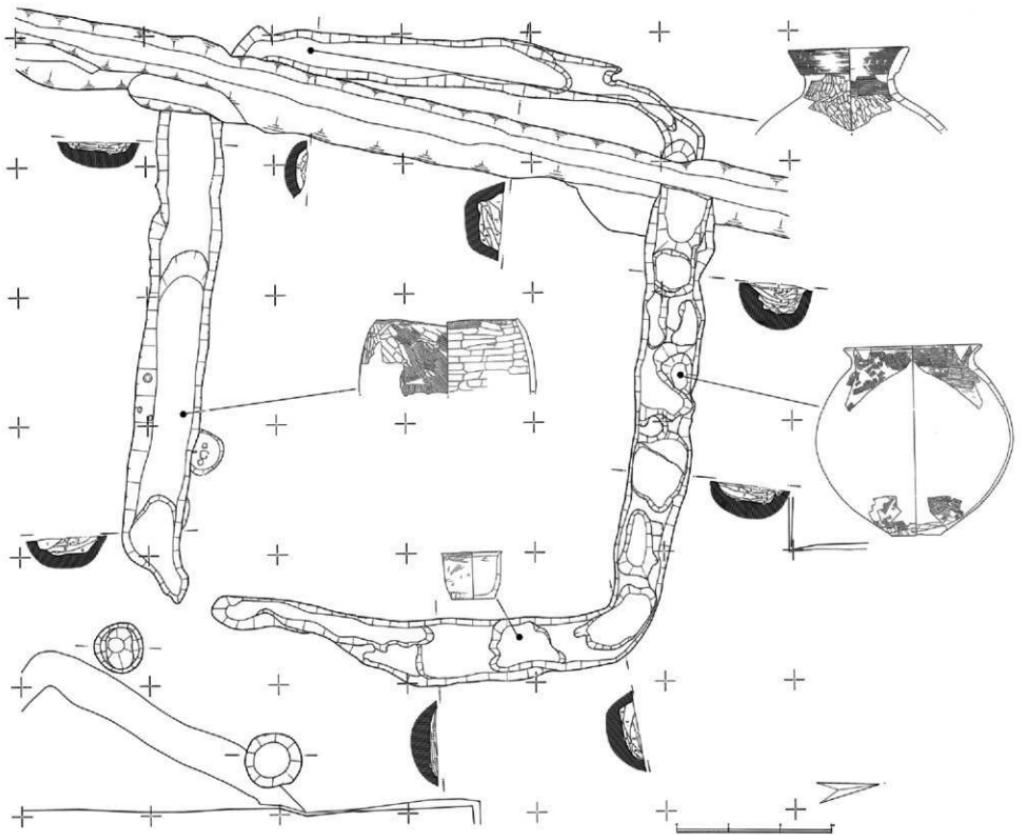
1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1



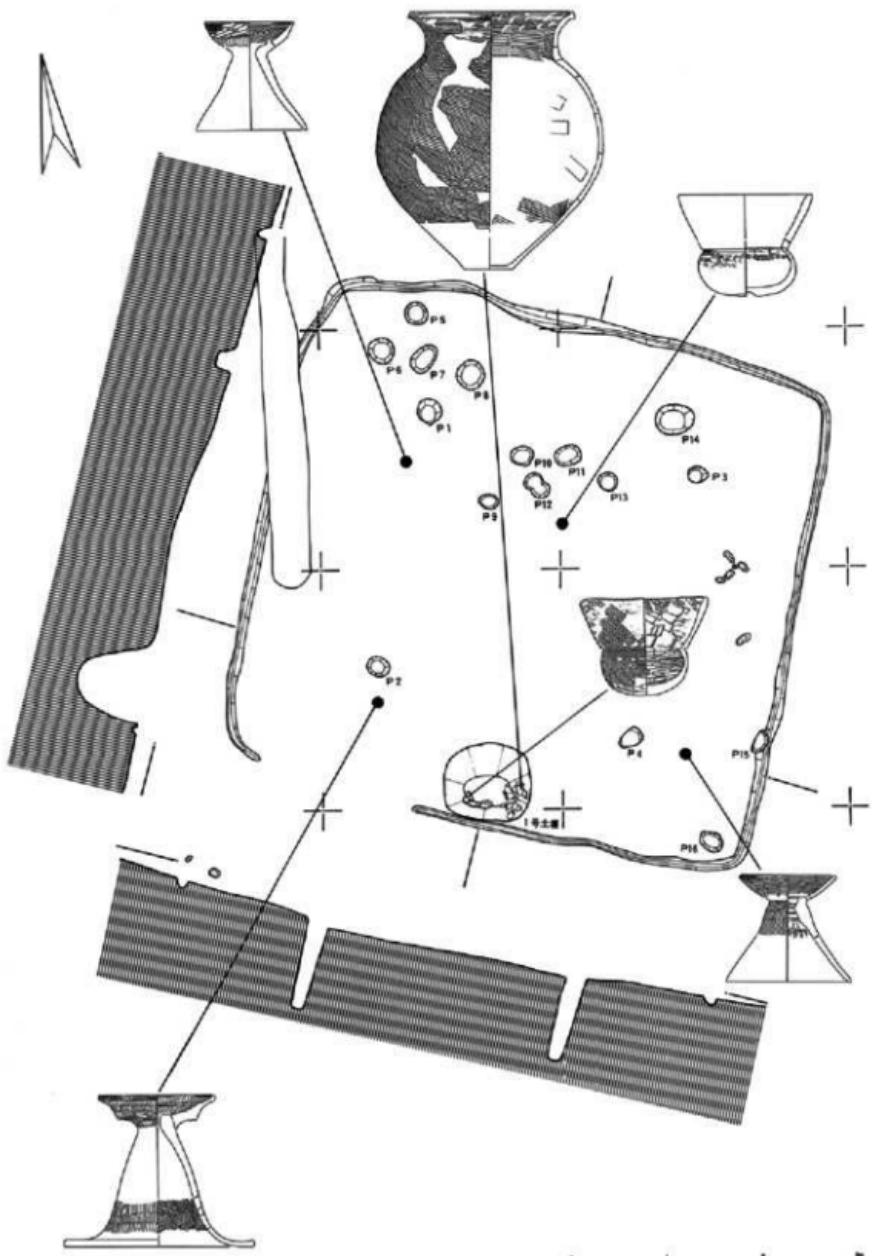
第4図 比丘尼平遺跡第Ⅰ次、Ⅱ次調査グリッド・トレンチ配置図



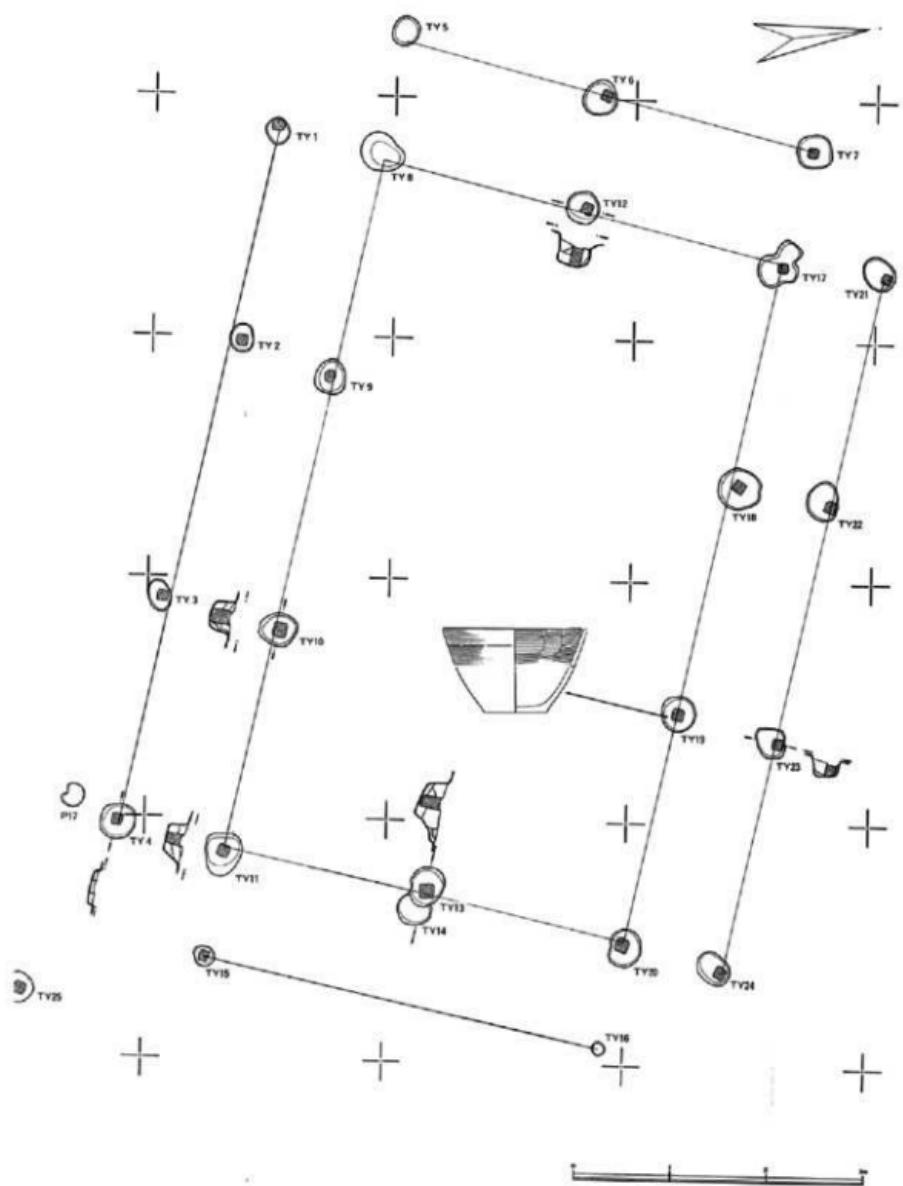
第5图 比丘尼平遗址第I次调查Ⅲ区遗构全图



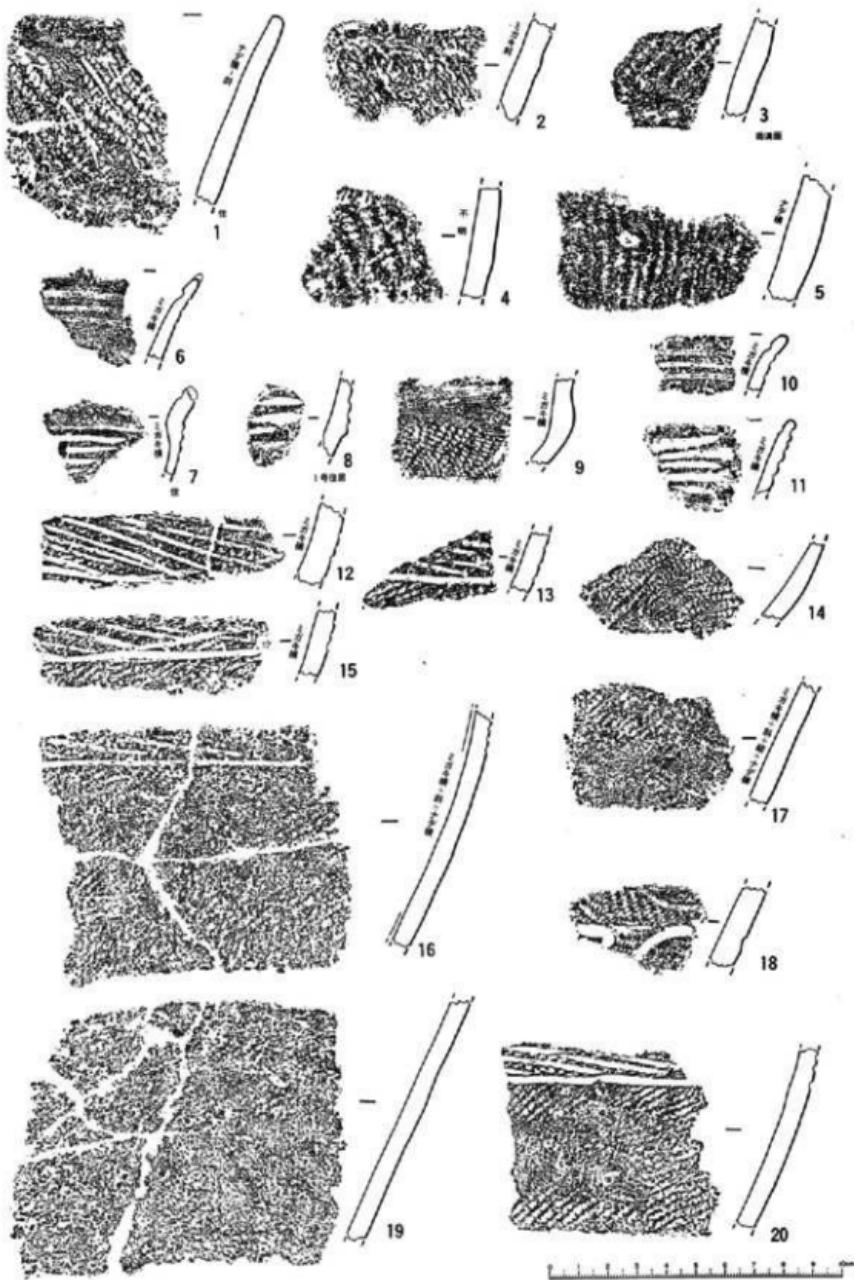
第6図 比丘尼平遺跡第1次調査第1号方形周溝墓平面図



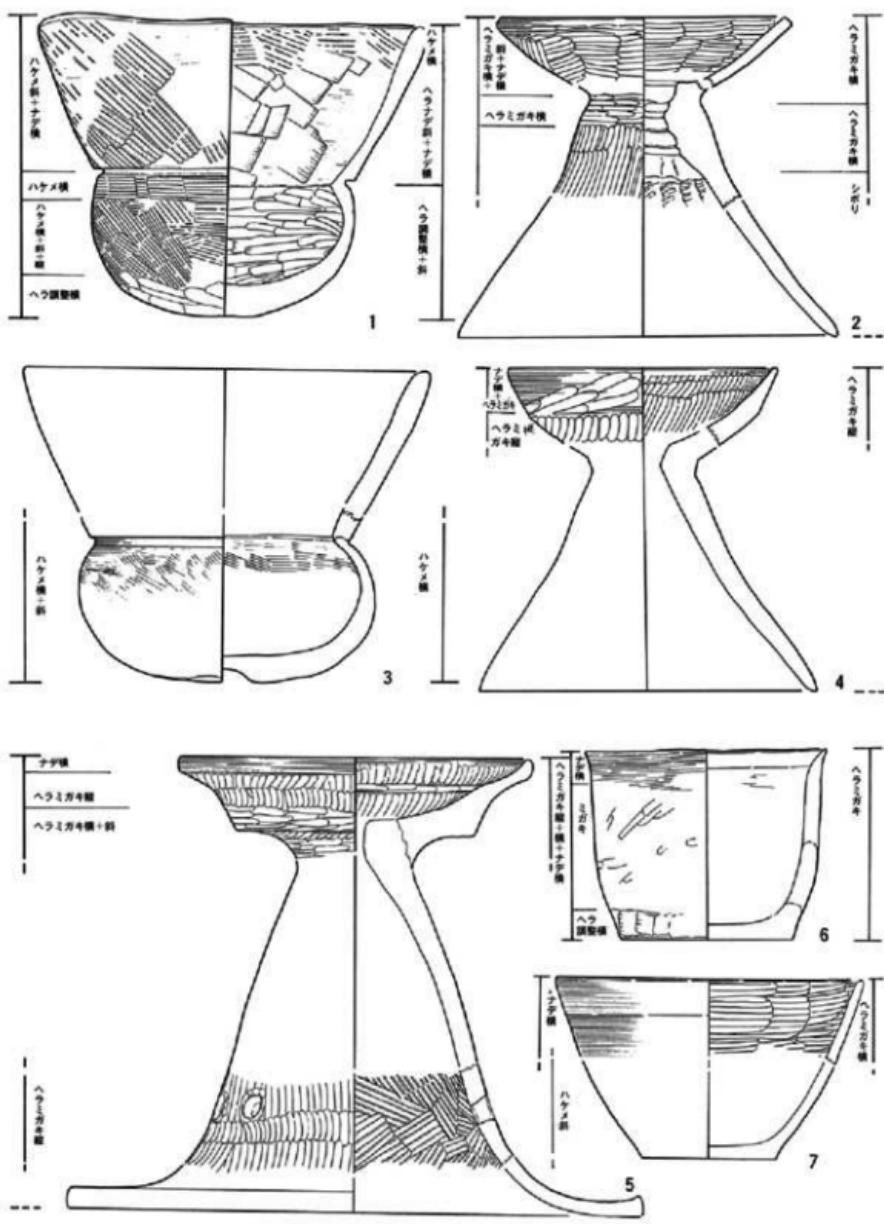
第7図 比丘尼平遺跡第1次調査第1号竪穴住居跡平面図



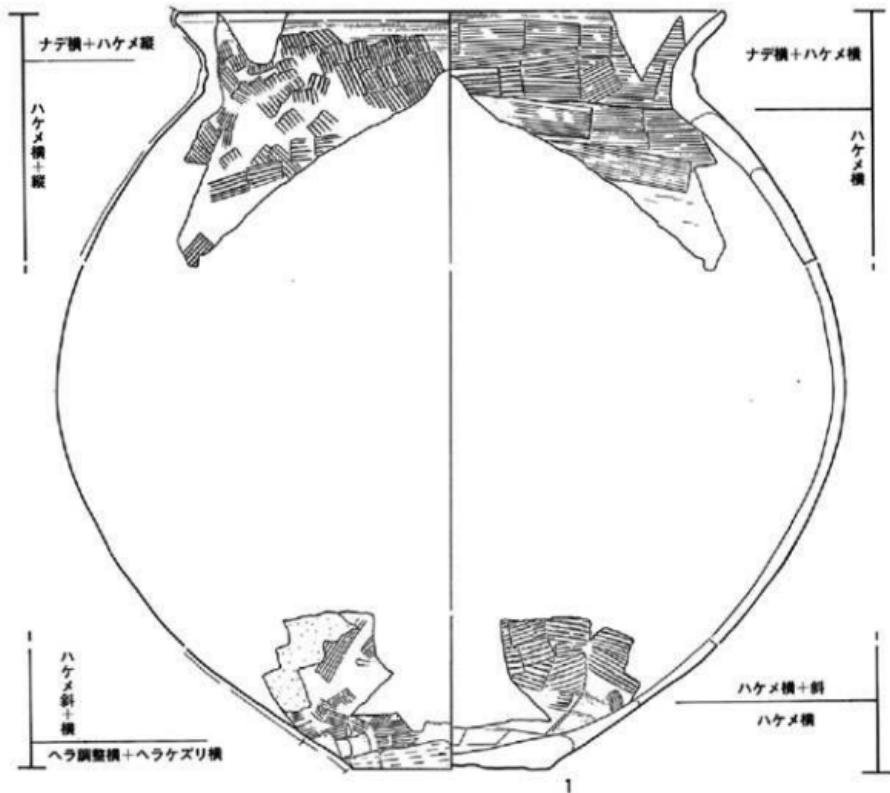
第8図 比丘尼平遺跡第1次調査第1号建物跡平面図



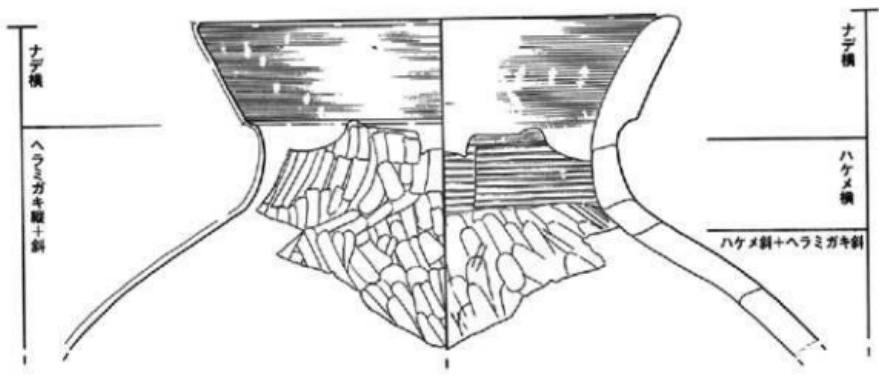
第9図 比丘尼平遺跡第I次調査出土土器拓影図



第10図 比丘尼平遺跡第I次調査出土土器実測図(1)

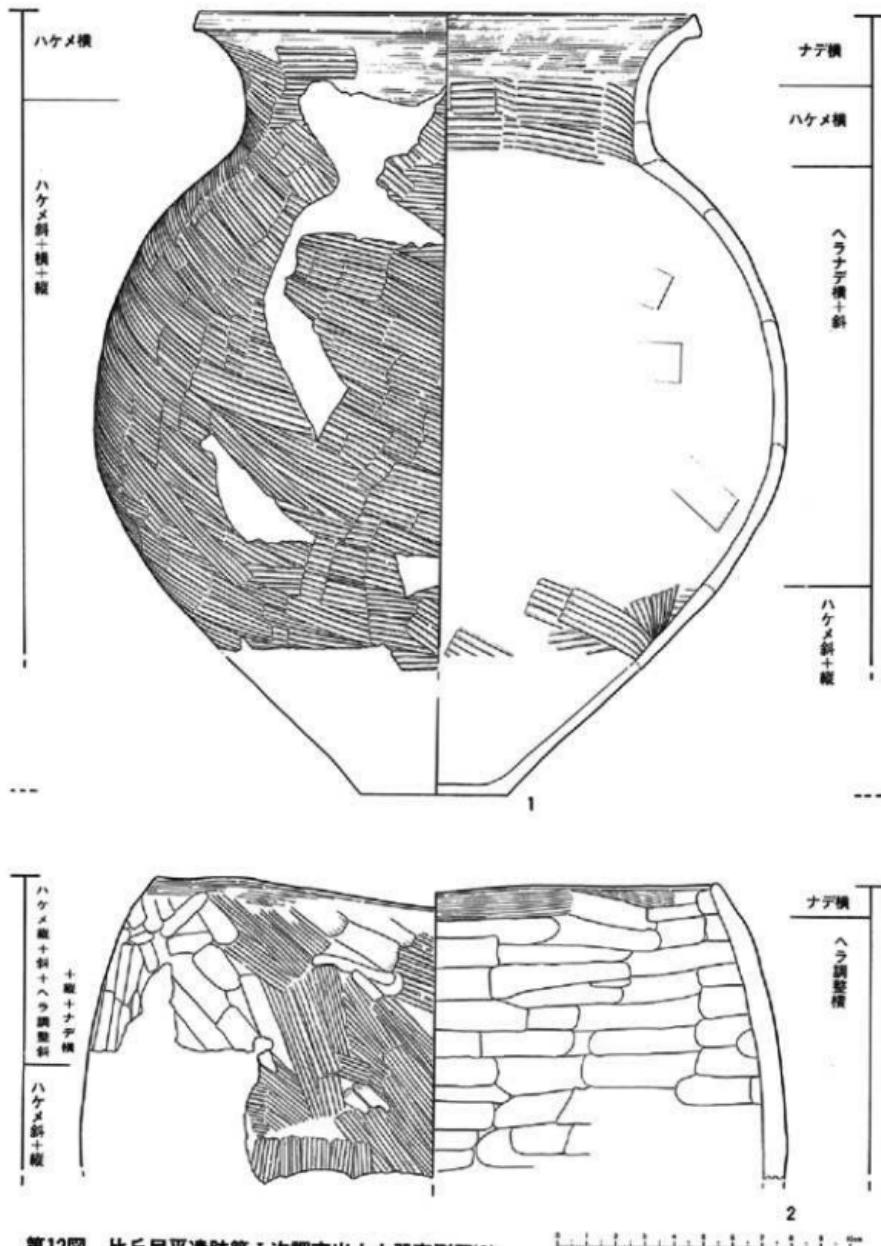


1

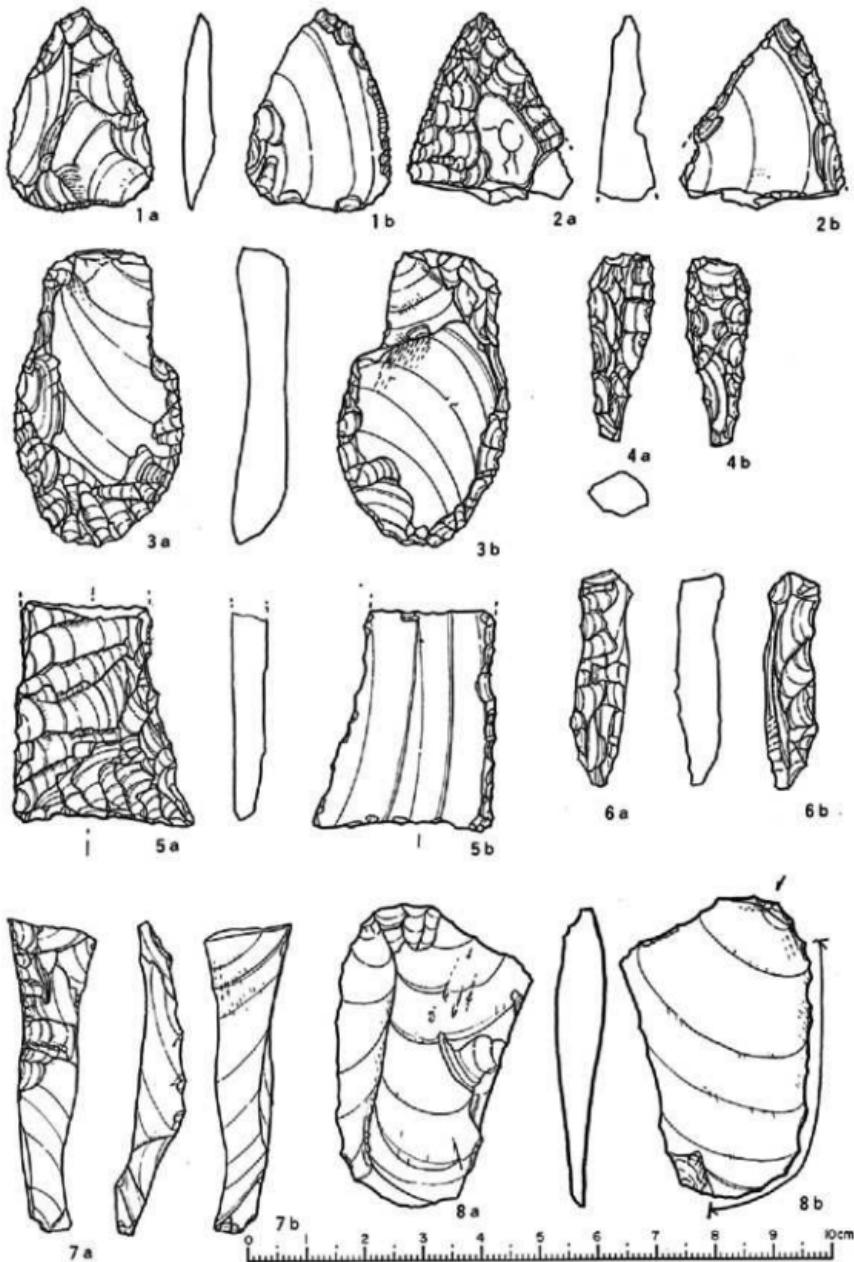


2

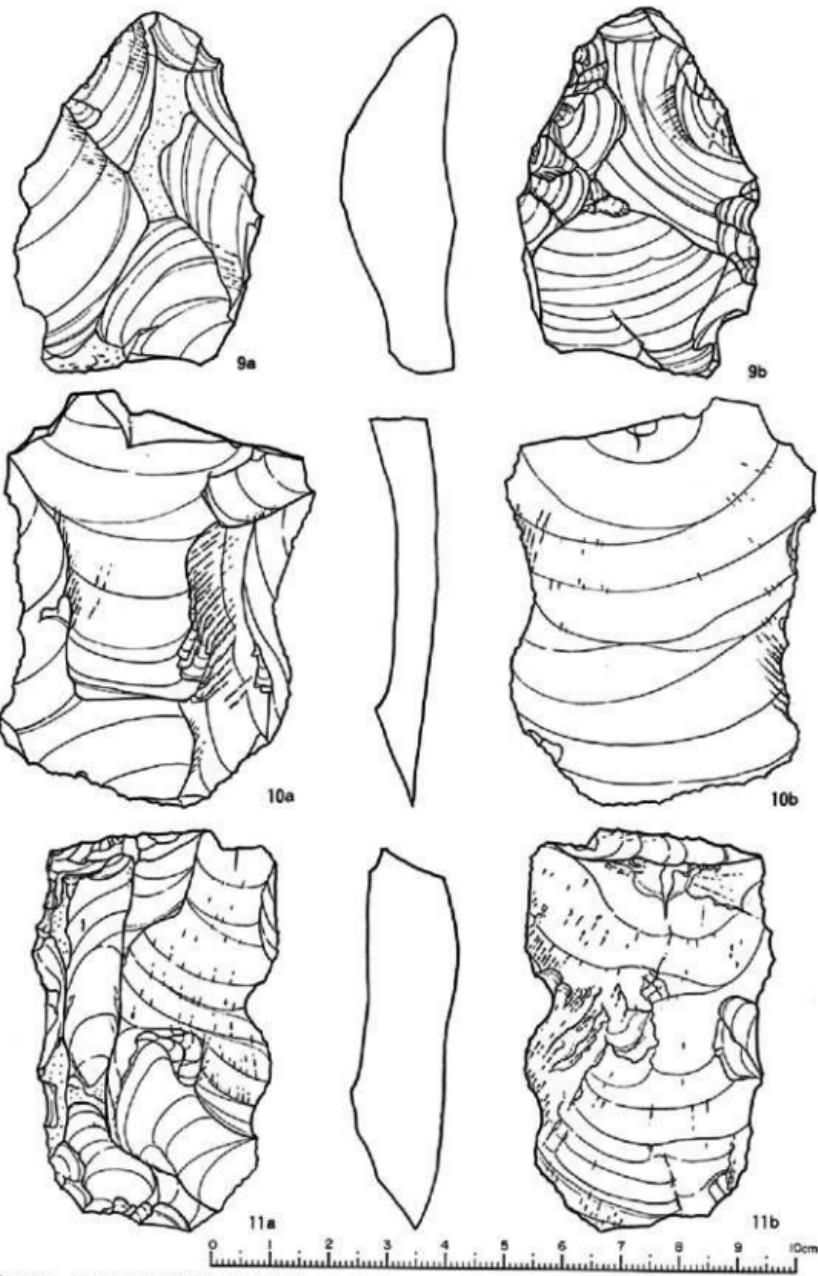
第11図 比丘尼平遺跡第Ⅰ次調査出土土器実測図(2)



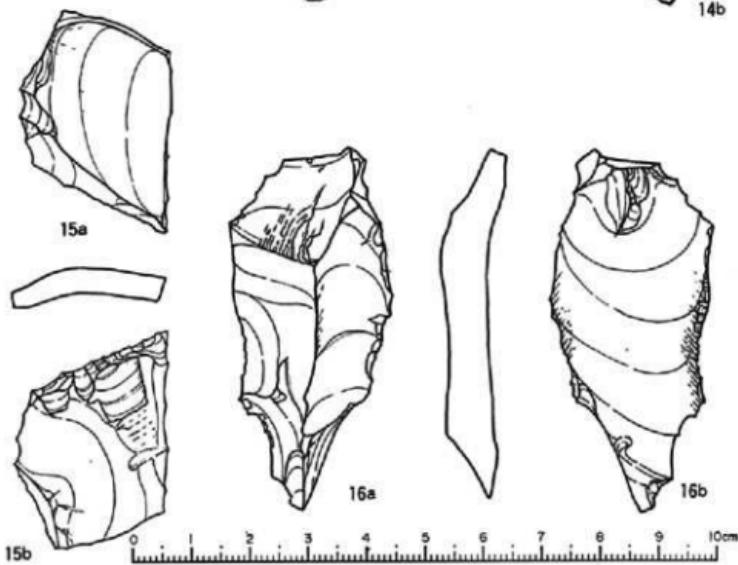
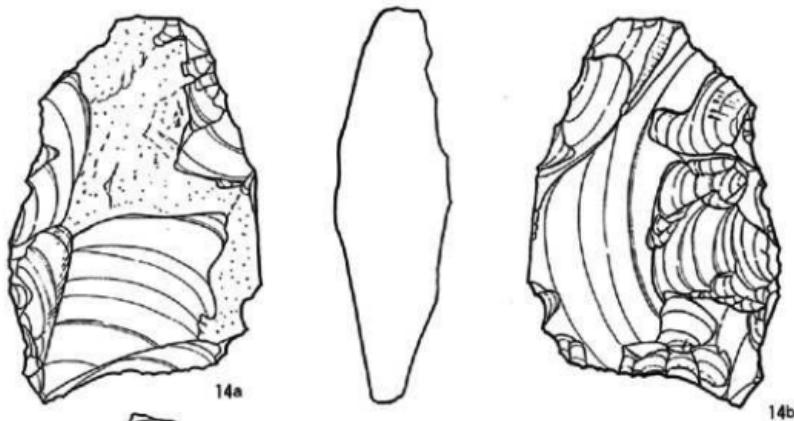
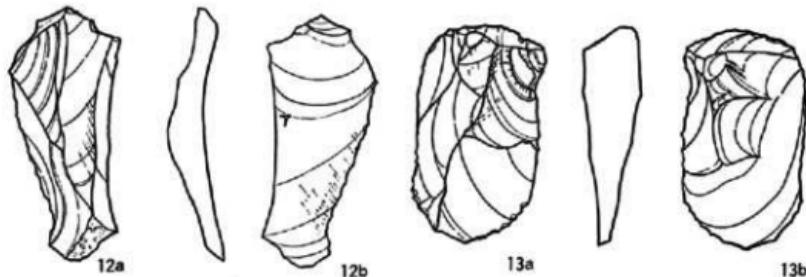
第12図 比丘尼平遺跡第Ⅰ次調査出土土器実測図(3)



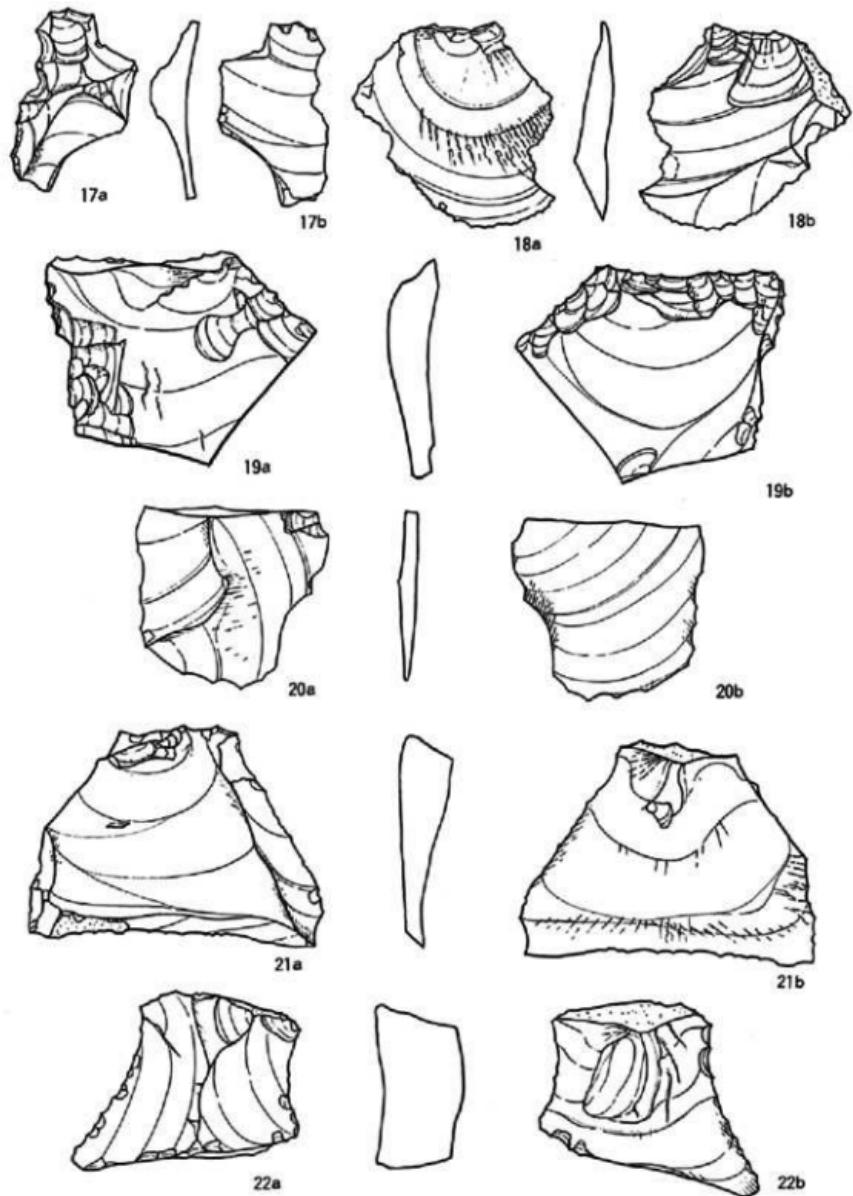
第13図 比丘尼平遺跡第I次調査出土石器実測図(1)



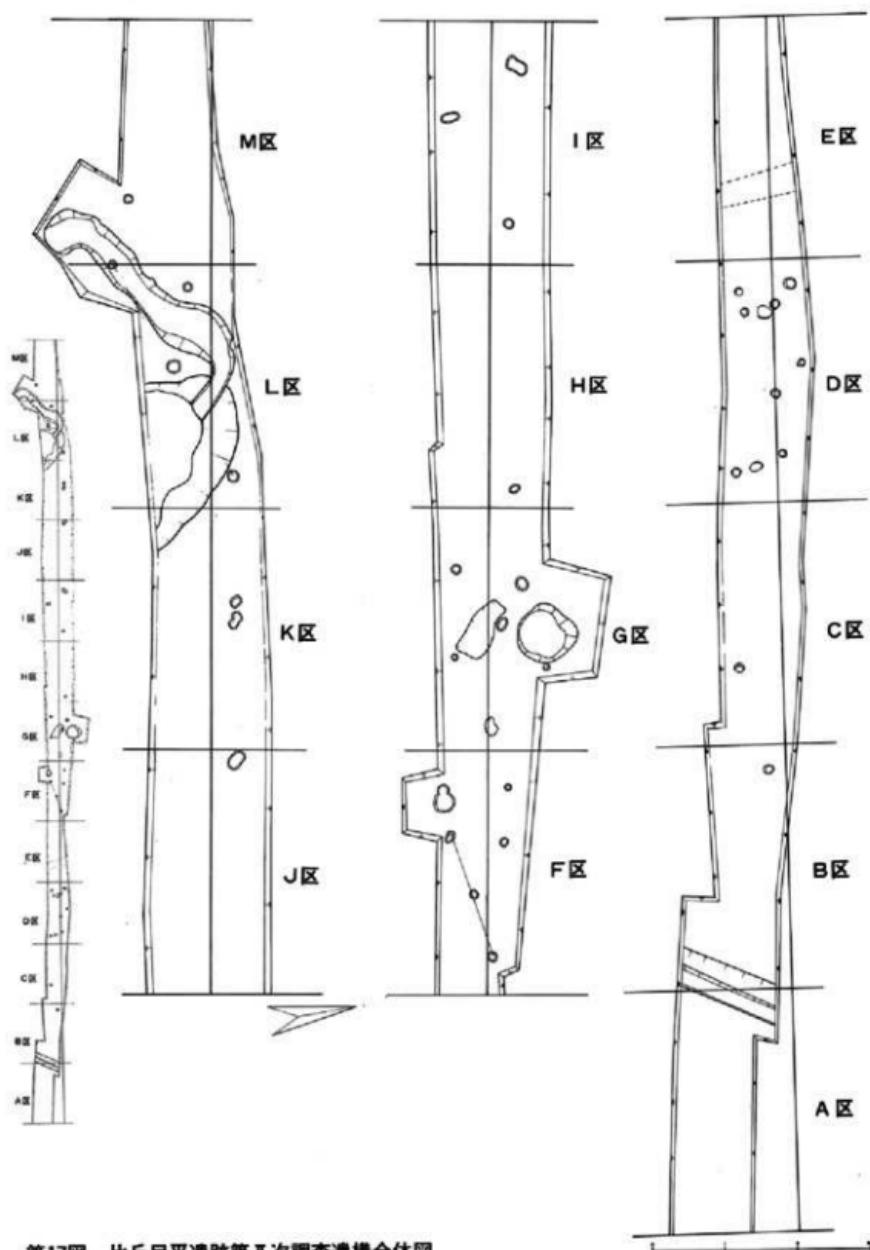
第14図 比丘尼平遺跡第I次調査出土石器実測図(2)



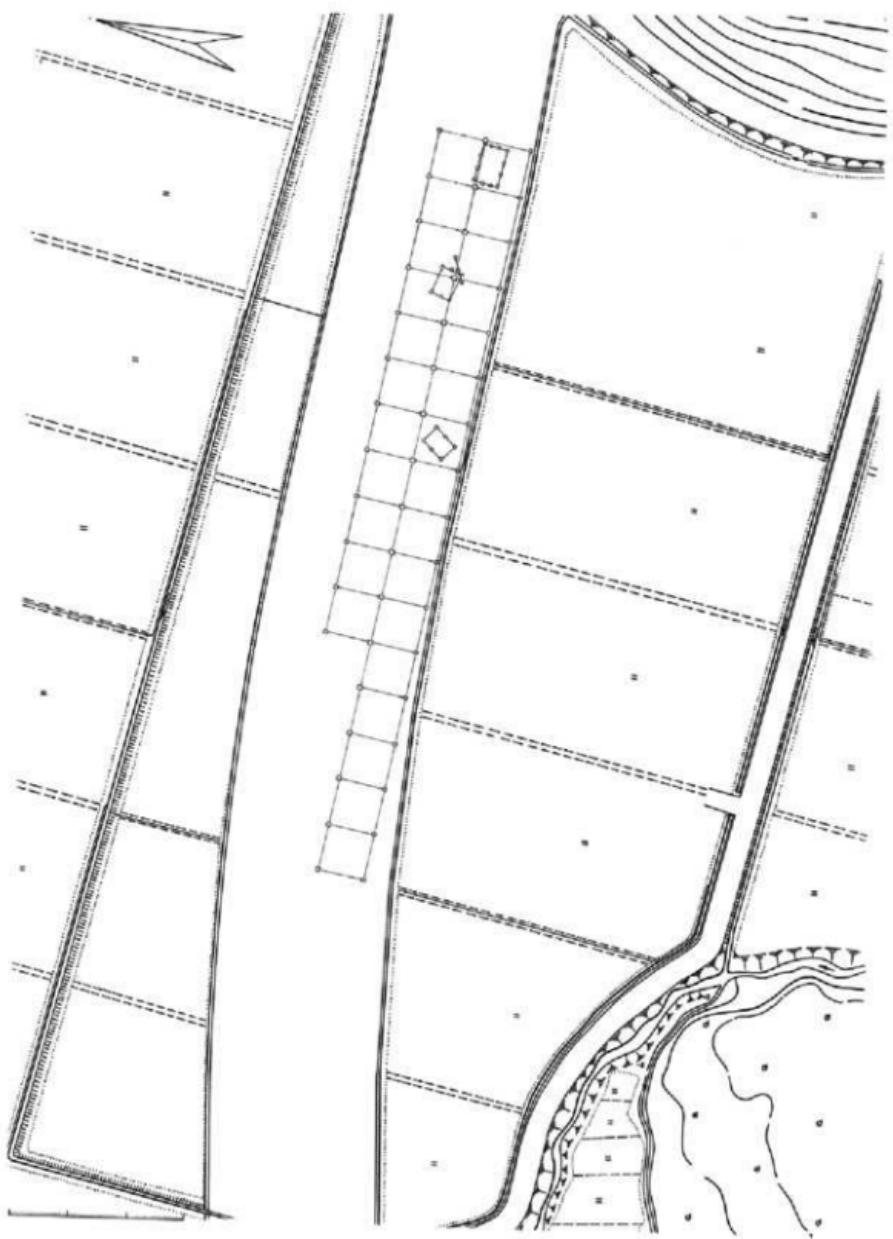
第15図 比丘尼平遺跡第Ⅰ次調査出土石器実測図(3)



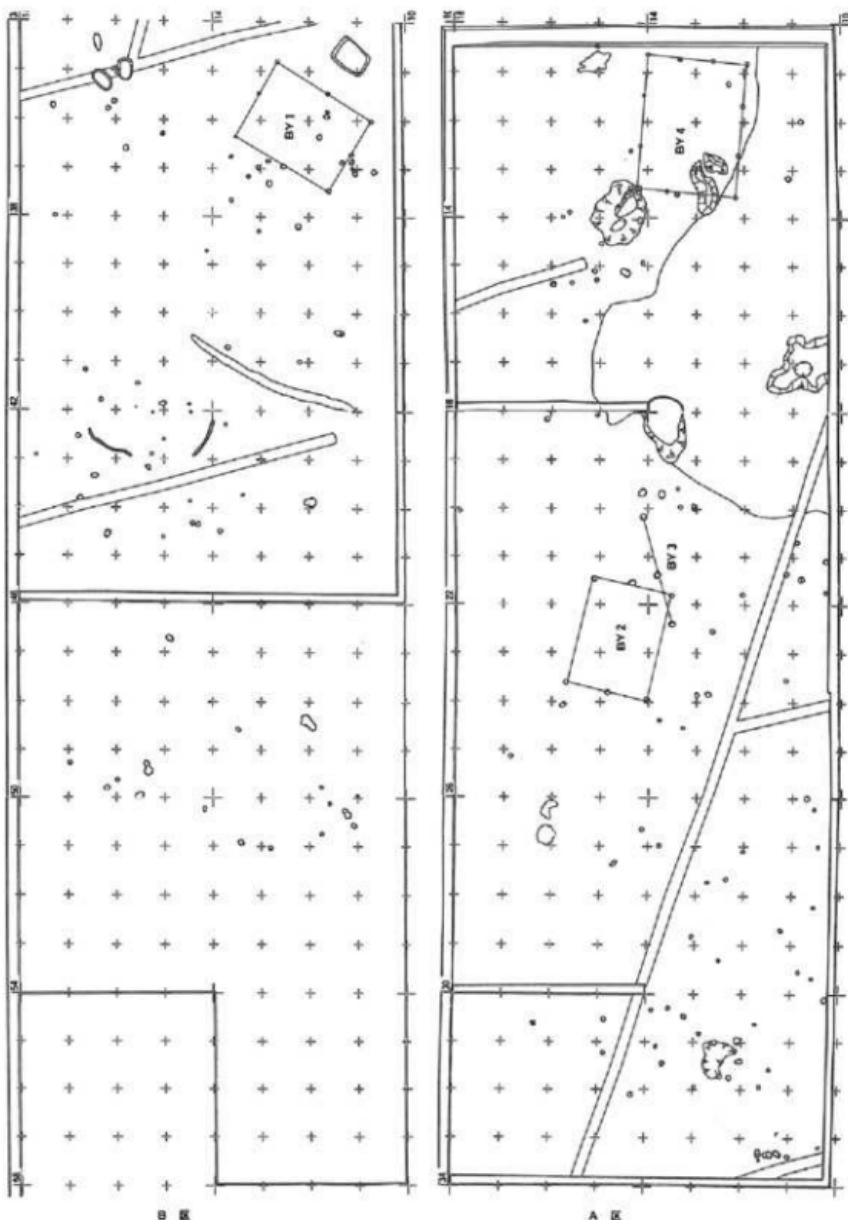
第16図 比丘尼平遺跡第Ⅰ次調査出土石器実測図(4)



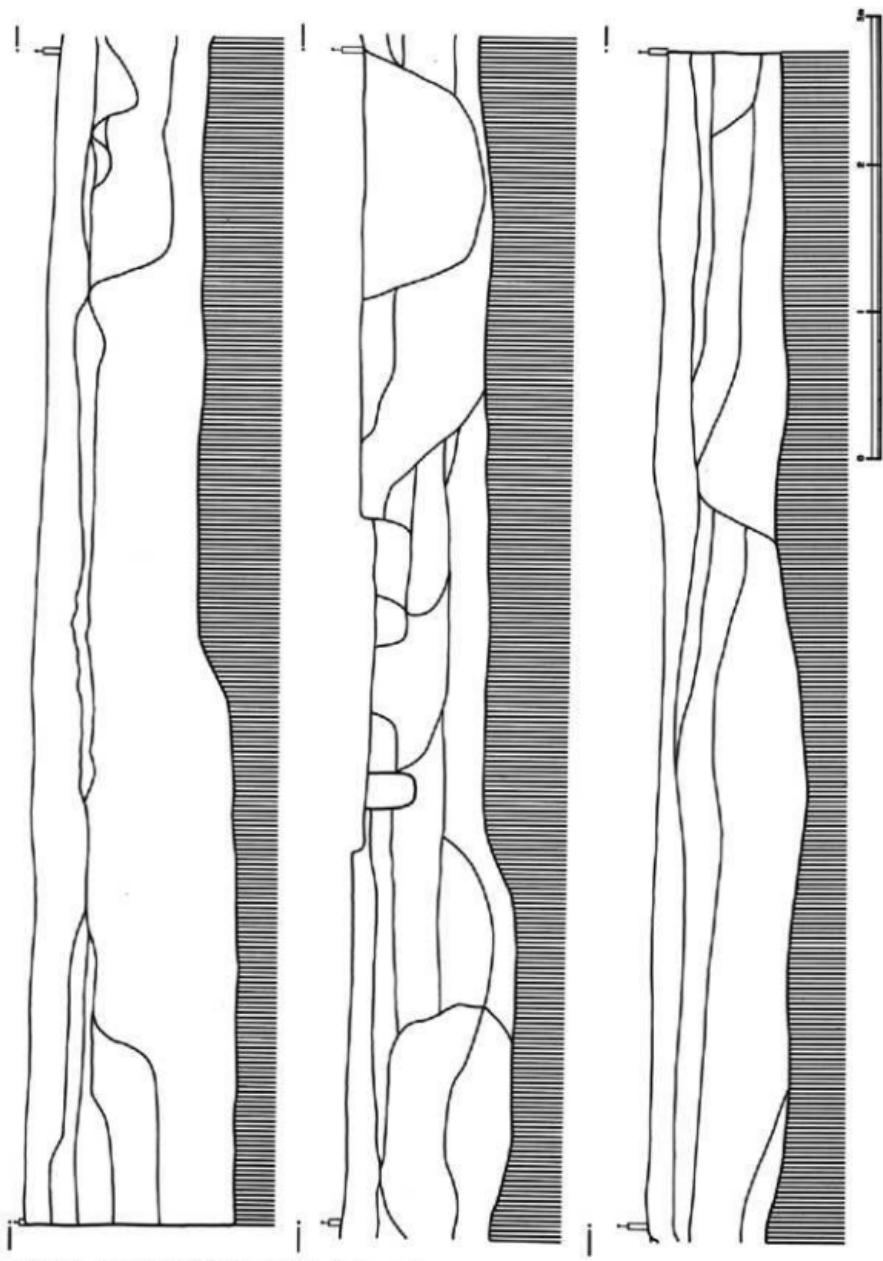
第17図 比丘尼平遺跡第Ⅱ次調査遺構全体図



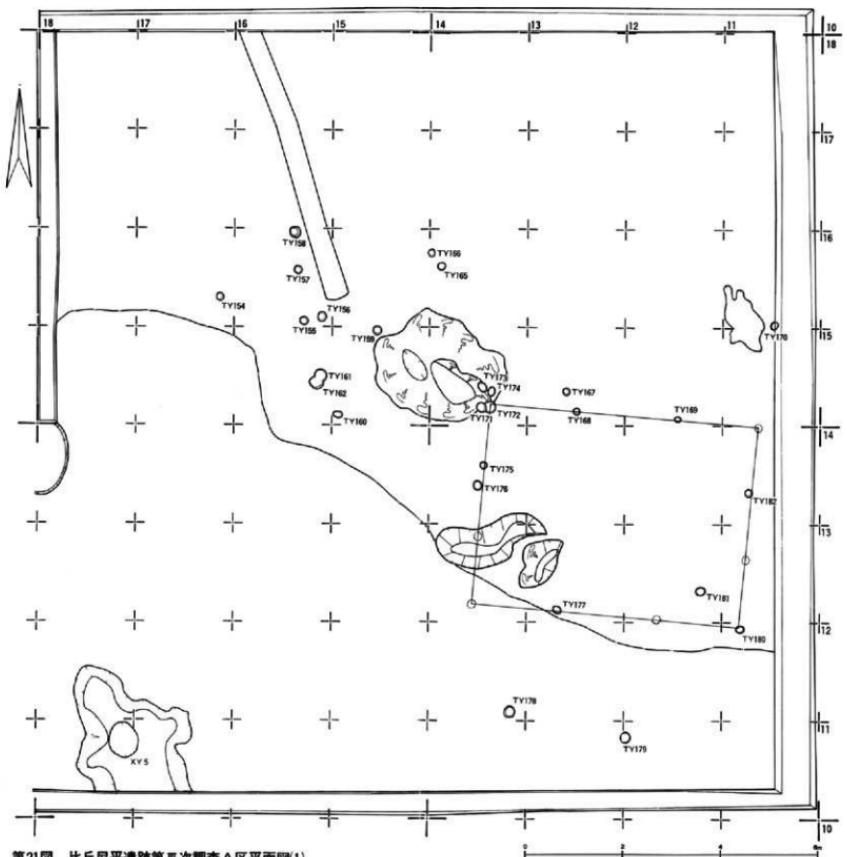
第18図 比丘尼平遺跡第Ⅲ次調査グリッド配置図



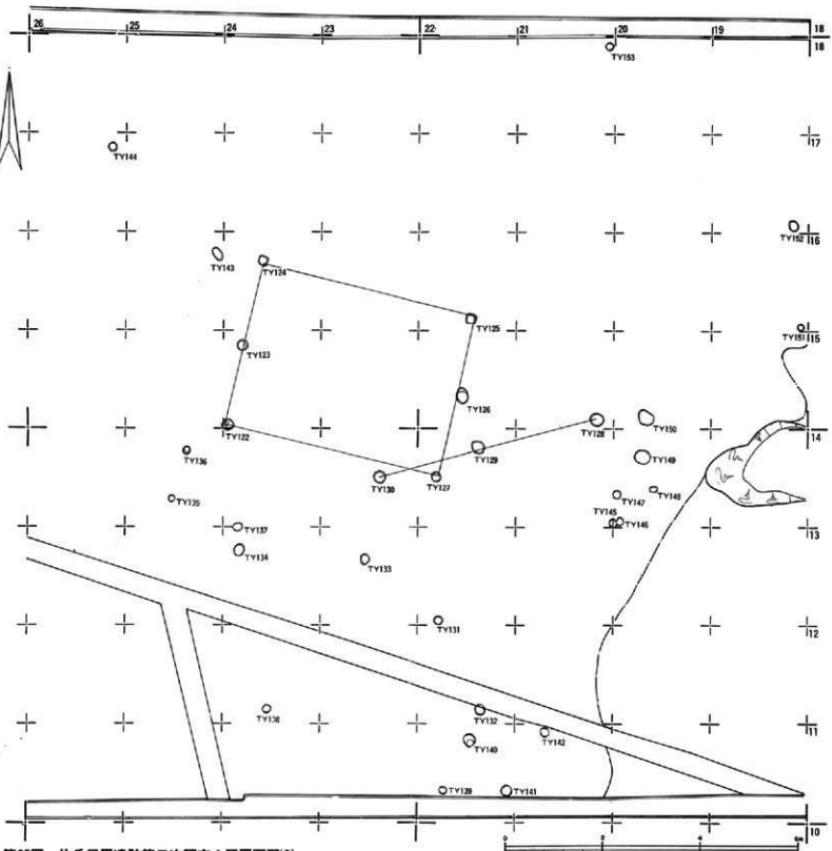
第19図 比丘尼平遺跡第Ⅲ次調査遺構全体図



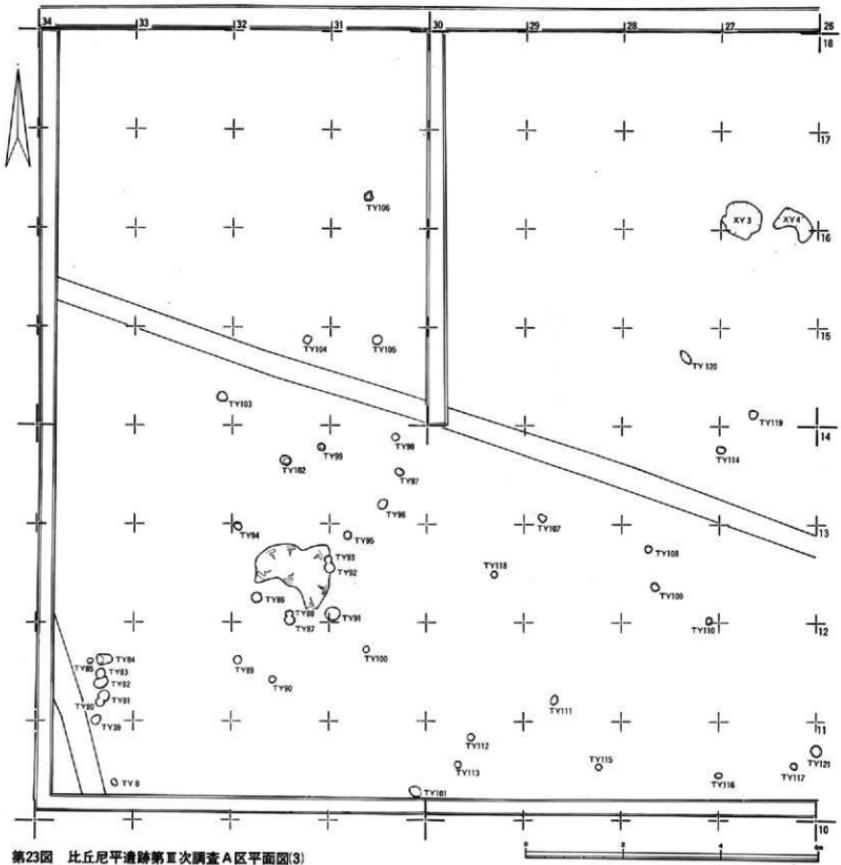
第20図 比丘尼平遺跡第Ⅲ次調査南壁セクション図



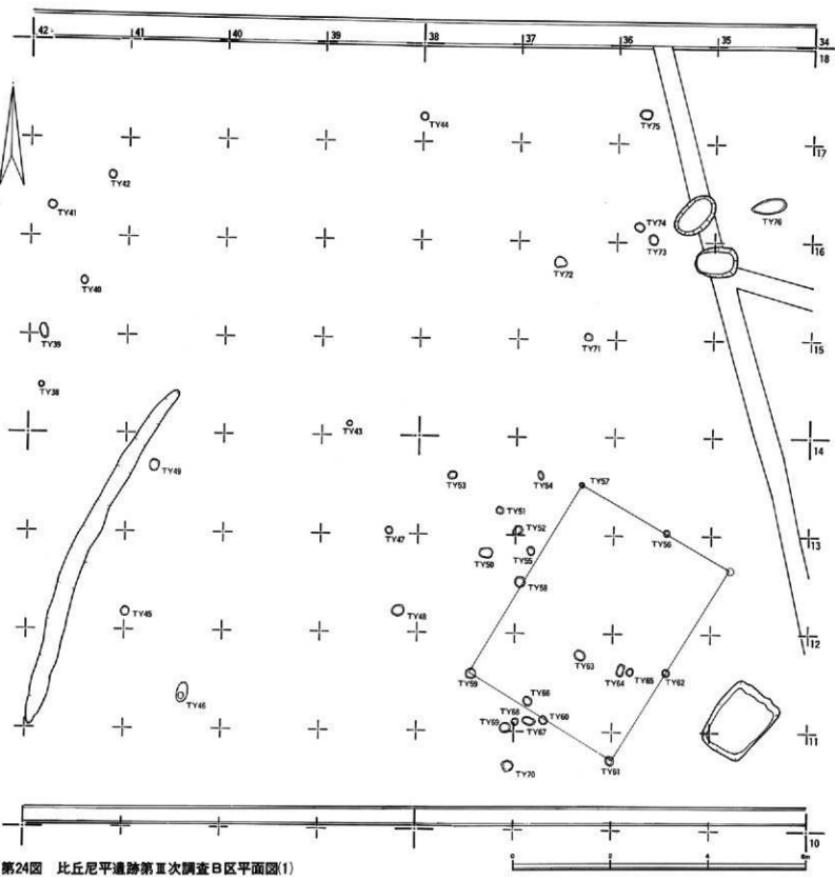
第21図 比丘尼平遺跡第三次調査A区平面図(1)



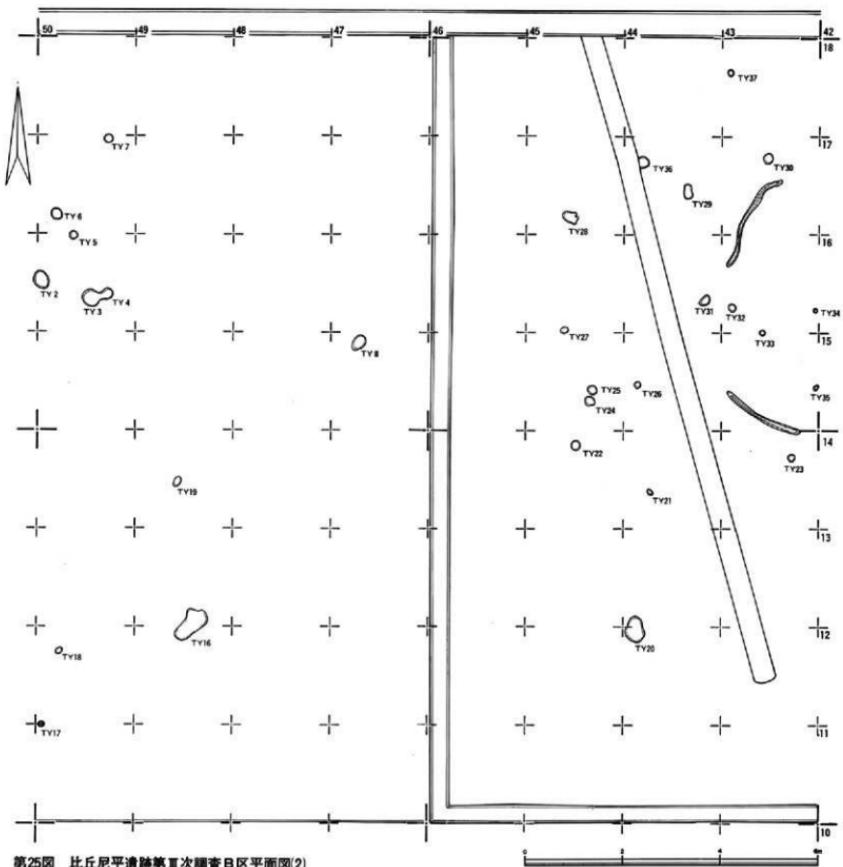
第22図 比丘尼平遺跡第2次調査A区平面図(2)



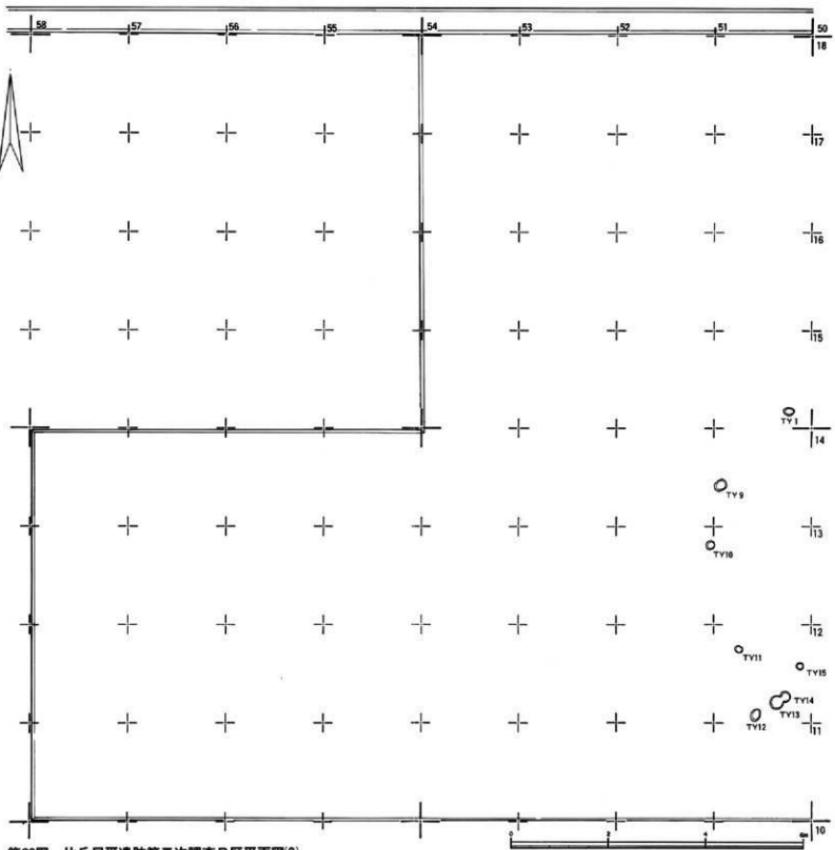
第23図 比丘尼平遺跡第Ⅲ次調査A区平面図(3)



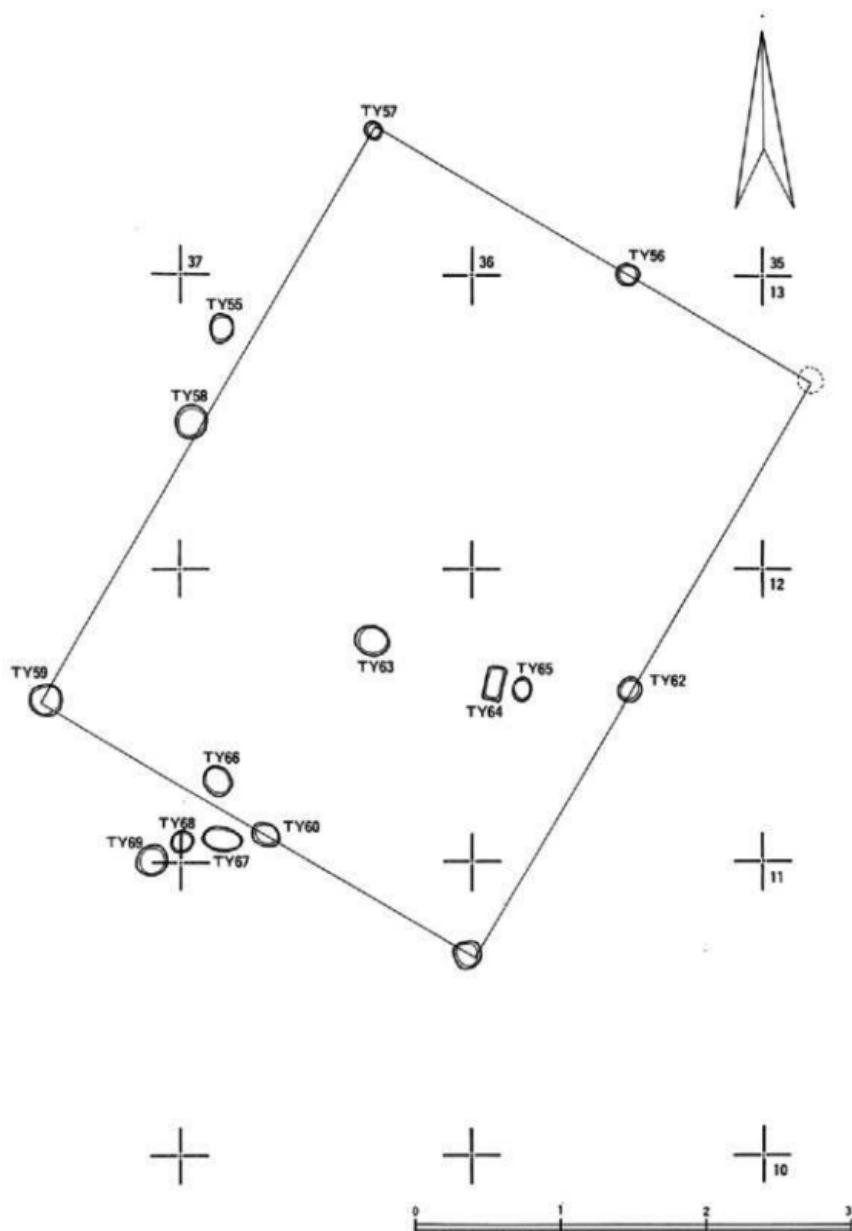
第24図 比丘尼平遺跡第Ⅲ次調査B区平面図(1)



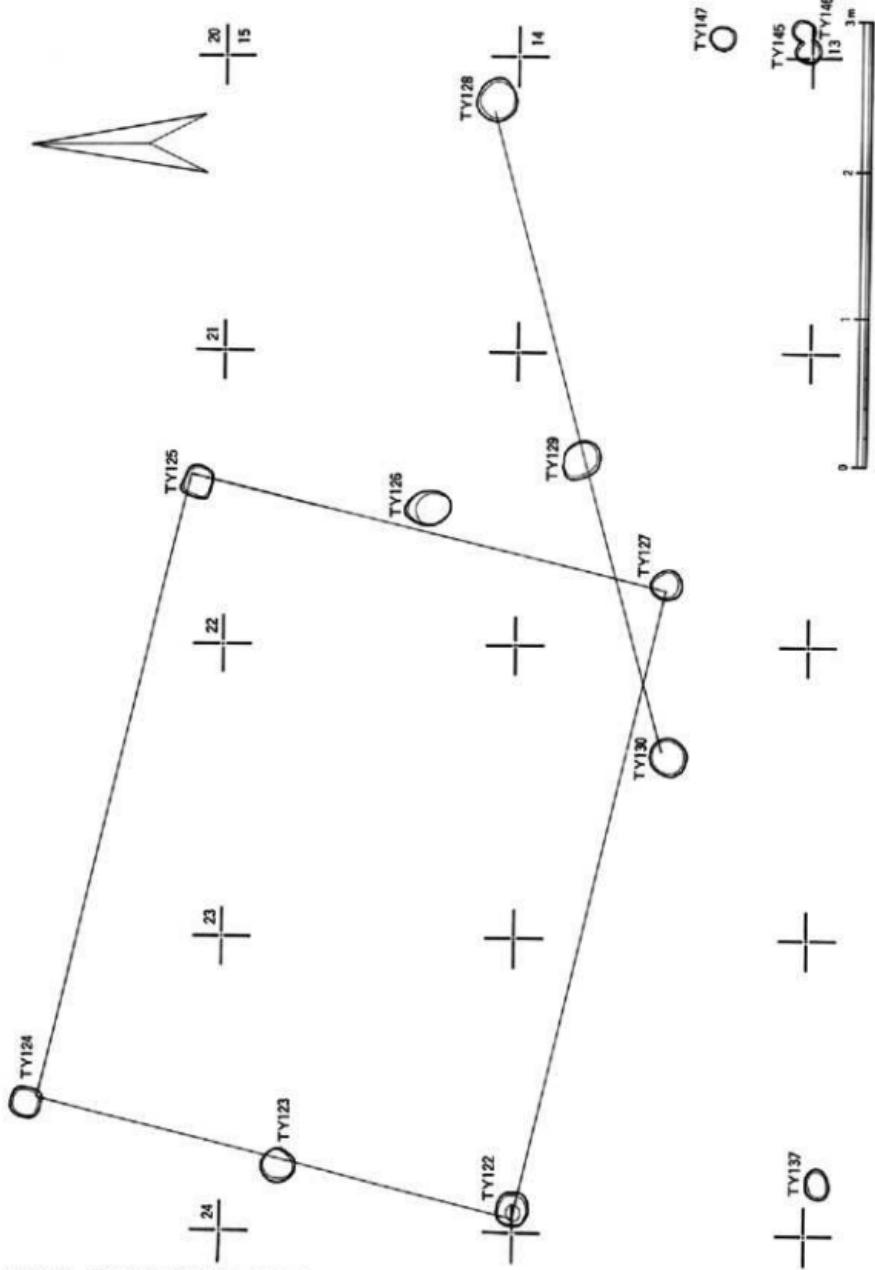
第25図 比丘尼平遺跡第3次調査B区平面図(2)



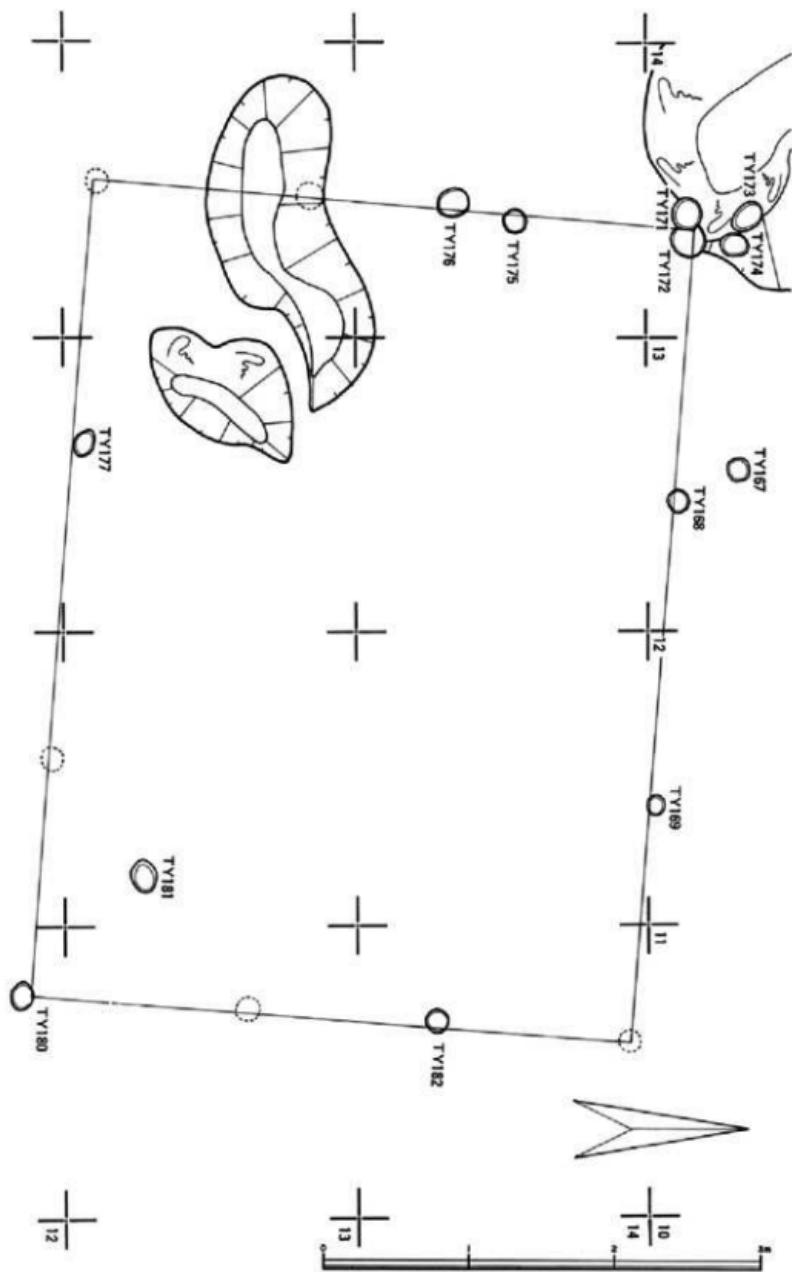
第26図 比丘尼平遺跡第三次調査B区平面図(3)



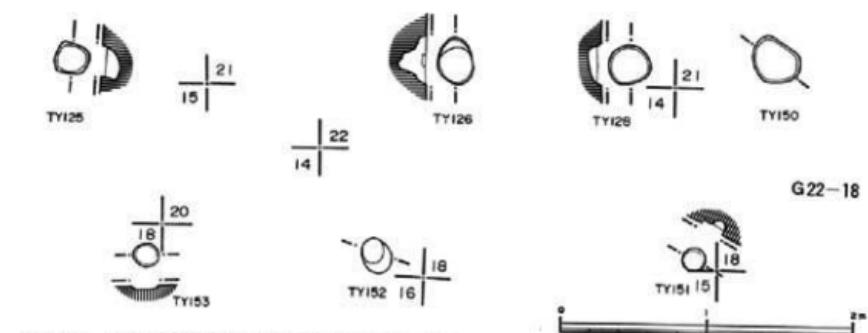
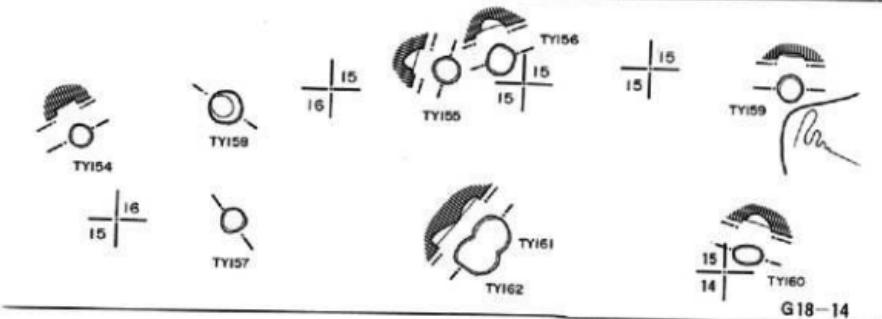
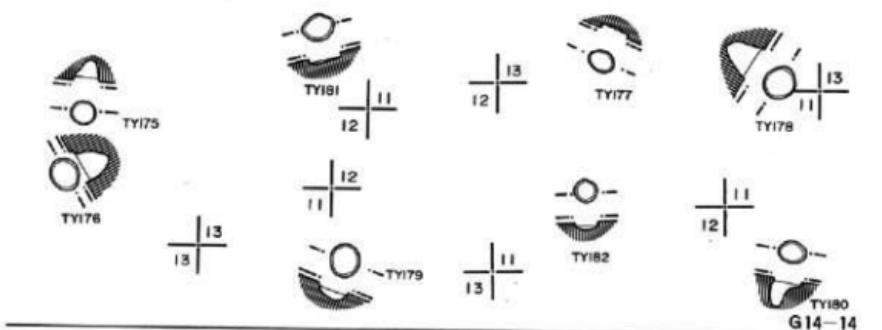
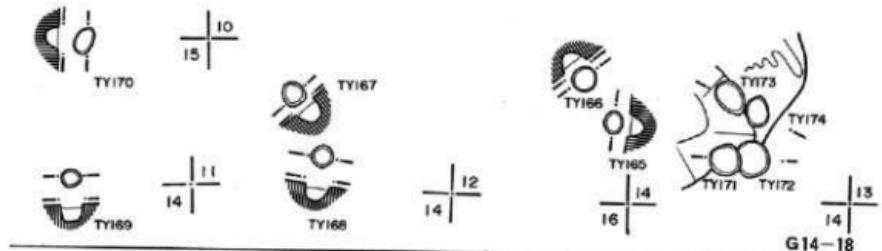
第27図 比丘尼平遺跡第Ⅲ次調査BY1 平面図



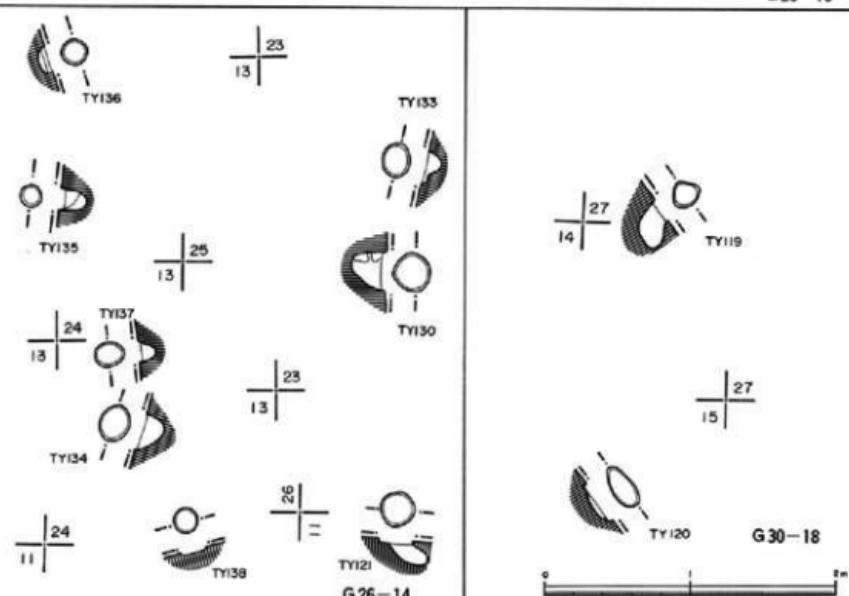
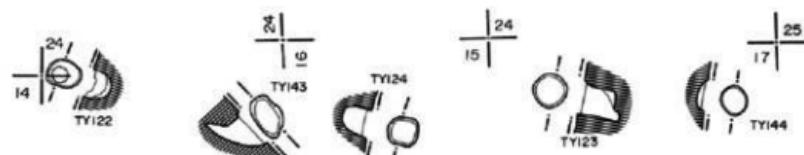
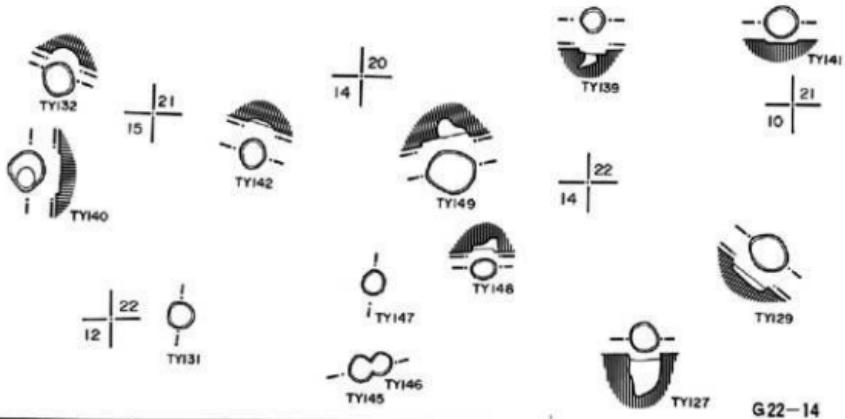
第28図 比丘尼平遺跡第Ⅲ次調査BY2・BY3平面図



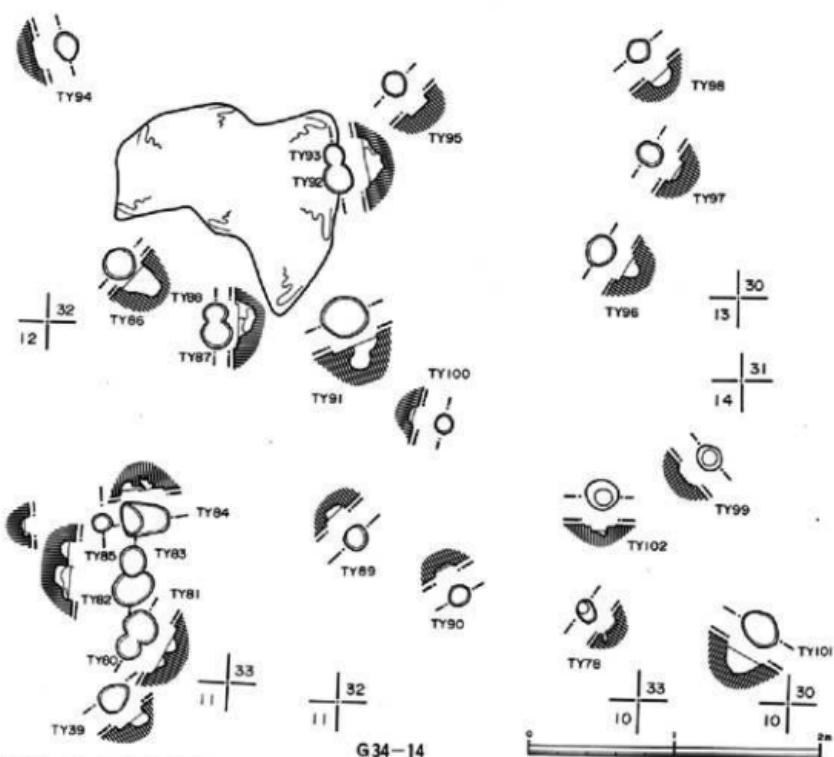
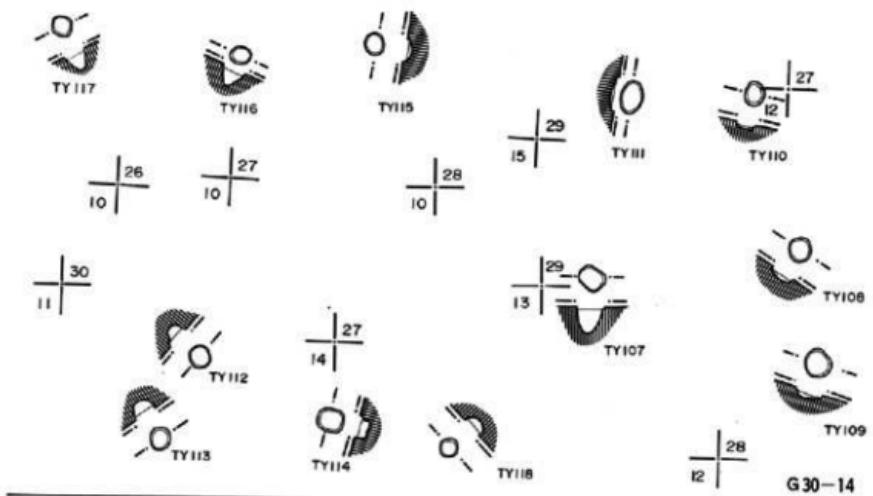
第29図 比丘尼平遺跡第Ⅲ次調査BY4 平面図



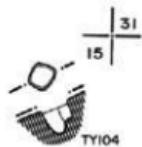
第30図 比丘尼平遺跡第Ⅲ次調査柱穴平面図(1)



第31図 比丘尼平遺跡第Ⅲ次調査柱穴平面図(2)



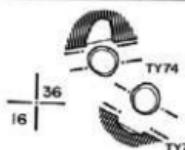
第32図 比丘尼平遺跡第Ⅲ次調査柱穴平面図(3)



16 | 31

14 | 32

G 34-18



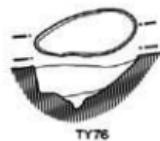
17 | 36

16 | 36

15 | 36

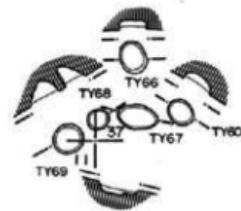
16 | 37

TY72  
G 38-18



16 | 34

14 | 38



13 | 37

13 | 36

TY56

12 | 35



11 | 36

11 | 37

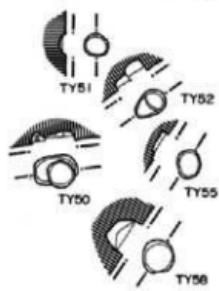


TY63



12 | 37

13 | 38



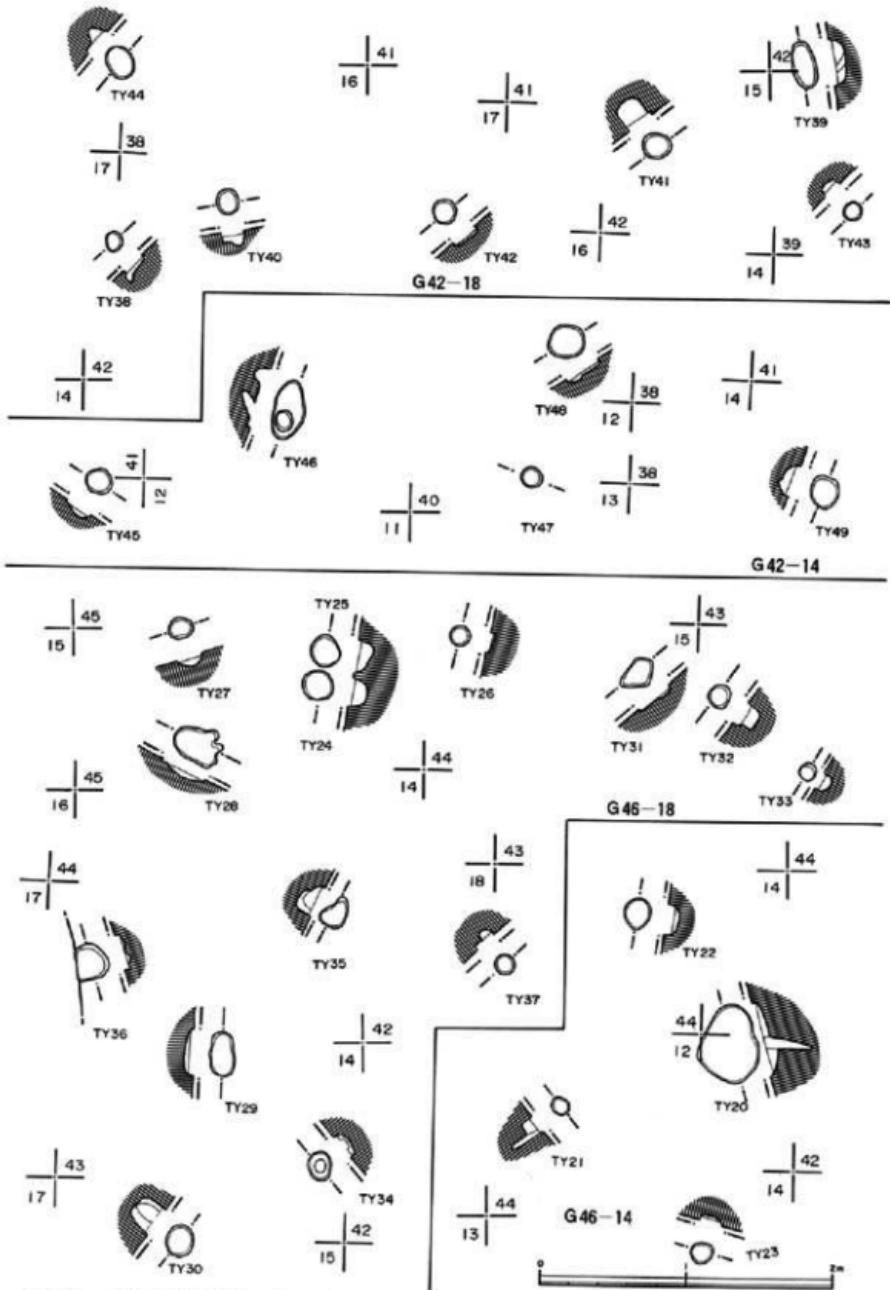
12 | 36



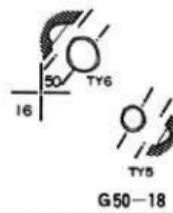
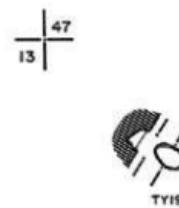
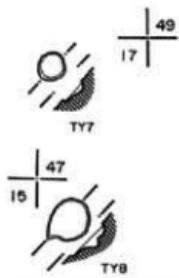
G 38-14



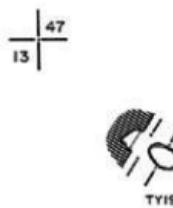
第33図 比丘尼平遺跡第Ⅲ次調査柱穴平面図(4)



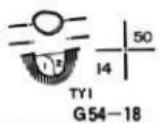
第34図 比丘尼平遺跡第Ⅲ次調査柱穴平面図(5)



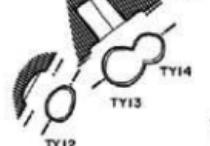
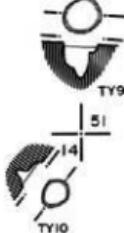
G50-18



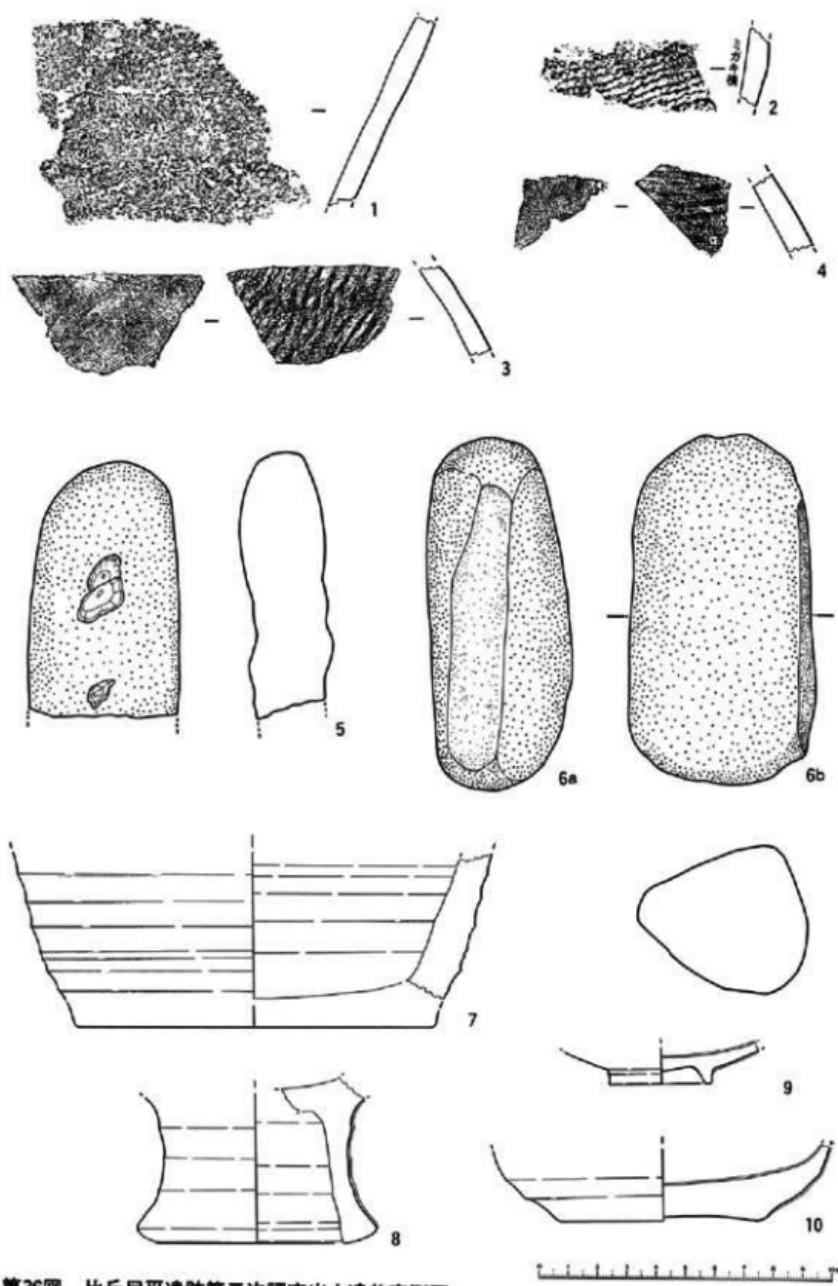
G50-14



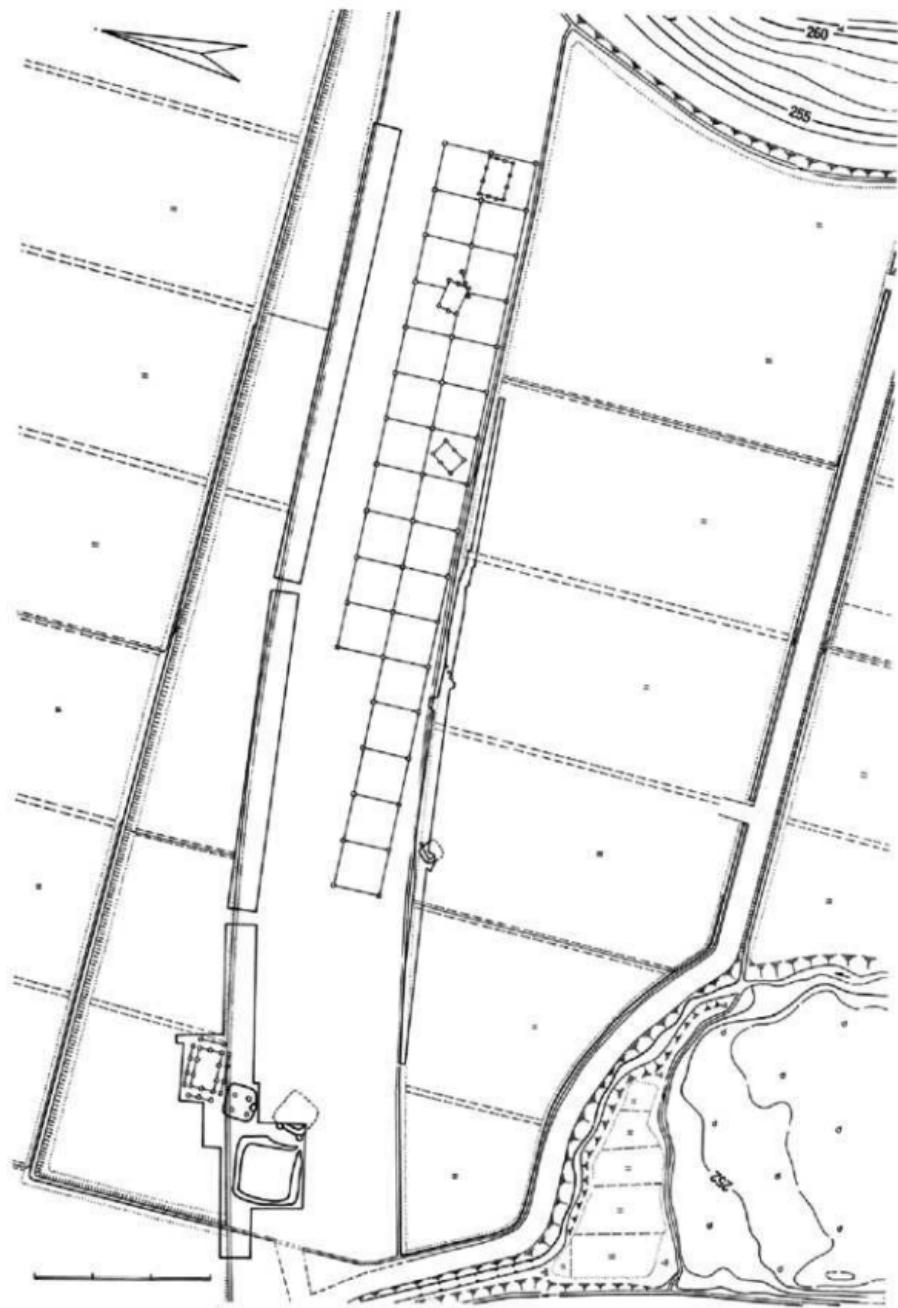
G54-18



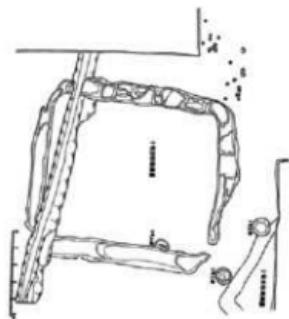
第35図 比丘尼平遺跡第Ⅲ次調査柱穴平面図(6)



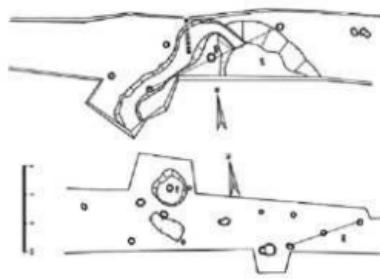
第36図 比丘尼平遺跡第Ⅱ次調査出土遺物実測図



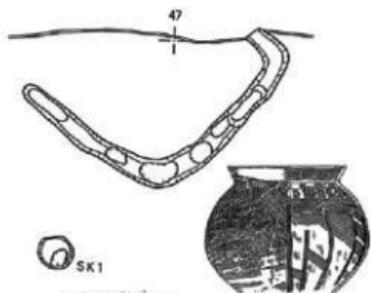
第37図 比丘尼平遺跡第Ⅰ～Ⅲ次調査遺構全体図



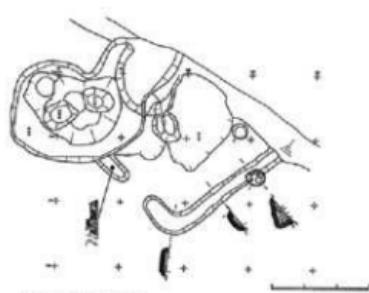
比丘尼平1号・2号方形周溝基



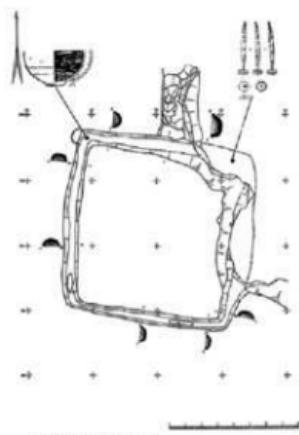
比丘尼平3号方形周溝基



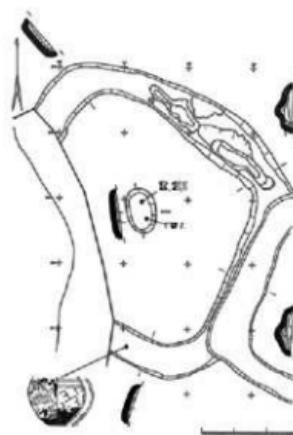
大瀬水1号方形周溝基



八幡堂5号方形周溝基

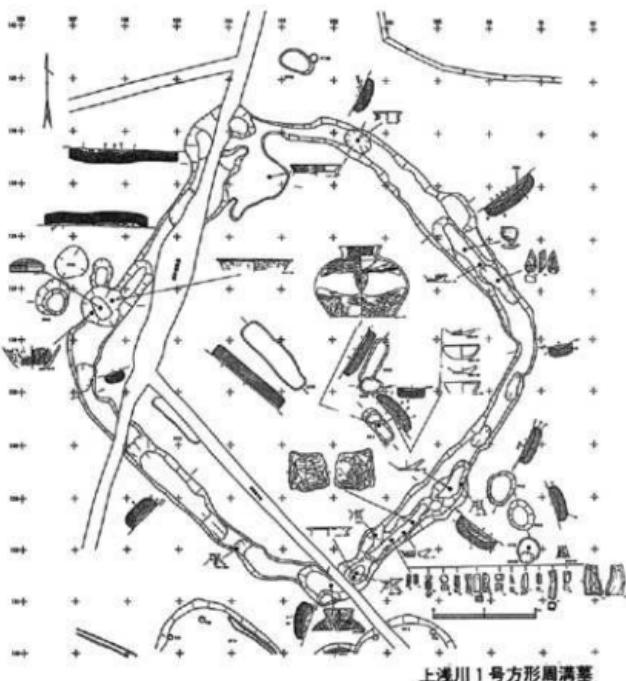


八幡堂1号方形周溝基

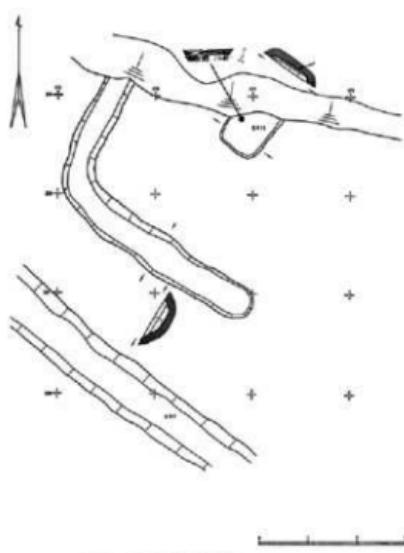


八幡堂2号方形周溝基

第38図 米沢市内の方形周溝基(1)



上浅川 1号方形周溝墓



八幡堂 4号方形周溝墓



八幡堂 3号方形周溝墓

第39図 米沢市内の方形周溝墓(2)

第2表 米沢市内の方形周溝墓分類表

遺跡名	造構番号	規 模 長径×短径 [m]	主体部 長径×短径 [m]	形態分類	出土遺物
比丘尼平	1号方形周溝墓	12.44×10.9	不明	C形態	土師器甕形土器2点 土師器壺形土器1点 土師器小形土器1点
	2号方形周溝墓	(6×?)	不明	不明	
	3号方形周溝墓	(?×5)	不明	不明	
大 清 水	1号方形周溝墓	(5)	不明	E形態	土師器甕形土器1点
八幡堂	1号方形周溝墓	11.8×11.6	不明	A形態	土師器甕形土器1点 紡錘車1点
	2号方形周溝墓	(8.5)×8.3	楕円形墓壙 140×90	A形態	底部穿孔土器1点 土師器小形土器1点
	3号方形周溝墓	(7.6)×6	長方形墓壙 121×62	D形態	土師器甕形土器1点 土師器小形土器1点
	4号方形周溝墓	(5)×(5)	長方形墓壙 (170)×92	E形態	土師器甕形土器1点
	5号方形周溝墓	(5)×(5)	不明	D形態	土師器甕形土器1点
上浅川	MN 1	16.2×16.1	縱長の楕円形墓壙4基 328×90(DY30) 238×(?) (DY31) 188×59(DY29) 150×58(RN4)	B形態	須恵器壺蓋1点、土師器甕 壺、塊、器台、24個体分 玉製管玉13点

※ 計測内の( )は推定

米沢市内から発見されている方形周溝墓は4遺跡10基で、平面形状の特徴から次の類に分けられる。

A形態 周溝が同じ幅をもって全周するグループで八幡堂遺跡の1号と2号方形周溝墓がこれにあたる。

B形態 周溝が同じ幅をもって全周するが、コーナー部のみが極端にすぼまるのを特徴とするグループで上浅川MN1がこれにあたる。

C形態 周溝のコーナーの端が切れるグループで比丘尼平遺跡の1号方形周溝墓1基がある。

D形態 全周する同溝が中央でブリッヂを有するグループで八幡堂遺跡の3号、5号方形周溝墓がこれにあたる。

E形態 周溝が「し」字状に配されると推測されるグループで八幡堂遺跡の4号方形周溝墓と大清水遺跡の1号方形周溝墓がこれにあたる。

## 参考文献

- 手塚 孝・秦 昭繁・安彦政信 (1972) 「米沢市万世町八幡原周辺の遺跡」『置賜考古第3号』置賜考古学会
- 伊藤 忍 (1972) 「米沢市堂森D遺跡出土の古式土師器」『置賜考古第3号』置賜考古学会
- 柏倉亮吉・加藤 稔・手塚 孝他 (1975~1977) 「米沢市八幡原中核工業団地造成予定地内埋蔵文化財調査報告書」第Ⅰ集~第Ⅲ集 米沢市教育委員会
- 手塚 孝 (1979) 「八幡原No43〔比丘尼平〕遺跡発掘調査報告書」米沢市教育委員会・置賜考古学会・まんぎり会
- 佐藤鎮雄・保角里志 (1979) 「稻荷森古墳—昭和53年度調査概報」山形県博物館
- 手塚 孝他 (1981) 「笹原」(米沢市埋蔵文化財調査報告書第7集) まんぎり会編
- 保角里志 (1980) 「稻荷森古墳—昭和54年度調査概報」山形県博物館
- 手塚 孝 (1982) 「比丘尼平遺跡第2次発掘調査概報」「まんぎり創刊号」まんぎり会
- 佐藤鎮雄 (1982) 「置賜地方の古墳—南陽市周辺の古墳を中心として」「まんぎり創刊号」まんぎり会
- 手塚 孝・菊地政信 (1982) 「米沢市万世町桑山団地造成地内埋蔵文化財調査報告書」第Ⅰ集 (米沢市埋蔵文化財調査報告書第6集) 米沢市教育委員会
- 加藤 稔・佐藤鎮雄 (1982) 「最上川流域の前方後円(方)墳」「最上川」山形県総合学術会
- 手塚 孝・菊地政信 (1983) 「米沢市万世町桑山団地造成地区埋蔵文化財調査報告書」第Ⅱ集 (米沢市埋蔵文化財調査報告書第8集) 米沢市教育委員会
- 加藤 稔・藤田宥宣他 (1986) 「天神森古墳発掘調査報告書」川西町教育委員会
- 佐藤庄一・名和達朗 (1985) 「沢田遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財調査報告書第88集) 山形県教育委員会
- 手塚 孝・菊地政信・村山正市・橋爪 健 (1986) 「上浅川第3次発掘調査報告書」(米沢市埋蔵文化財調査報告書第15集) 米沢市教育委員会

- 手塚 孝・菊地政信 (1986)『米沢市万世町桑山団地造成地区埋蔵文化財調査報告書』第  
III集(米沢市埋蔵文化財調査報告書第17集)米沢市教育委員会
- 渋谷孝雄 (1986)『諏訪前遺跡発掘調査報告書』(山形県埋蔵文化財調査報告書第102集)  
山形県教育委員会
- 川崎利夫 (1986)「日本海側行政圏域における古墳の実態と展回」東アジアの近代文化47
- 藤田有宣 (1986)『下小松墳丘群小森山支群第60・64号墳調査報告書』川西町教育委員会
- 手塚 孝 (1986)『米沢の古代文化』まんぎり会

# 写 真 図 版

第一図版 比丘尼平遺跡第1次調査の発掘(一)



▲第1次調査区全景



▲ 1号掘立建物跡全景



▲ 1号竪穴住居跡全景



▲堂森山から遺跡全体を望む



▲発掘風景状況



▲ A区遺構全景



▲ 調査区全景



▲昭和40年出土の古式土師器 1・2(まんぎり会)



1



2

▲第Ⅰ次調査第1号竪穴住居跡出土の完形土器1・2(まんぎり会)



1

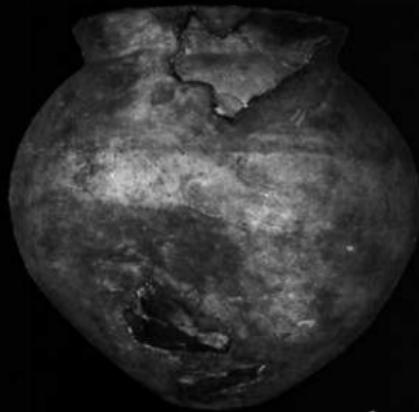


2

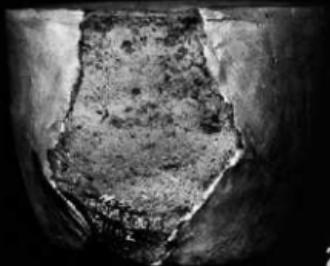
▲第Ⅰ次調査第1号竪穴住居跡出土の完形土器1・2(まんぎり会)



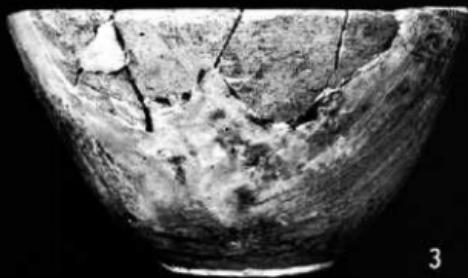
▲第1次調査第1号竪穴住居跡出土の完形土器 1  
同上 1号方形周溝墓西溝底面出土 2



1



2



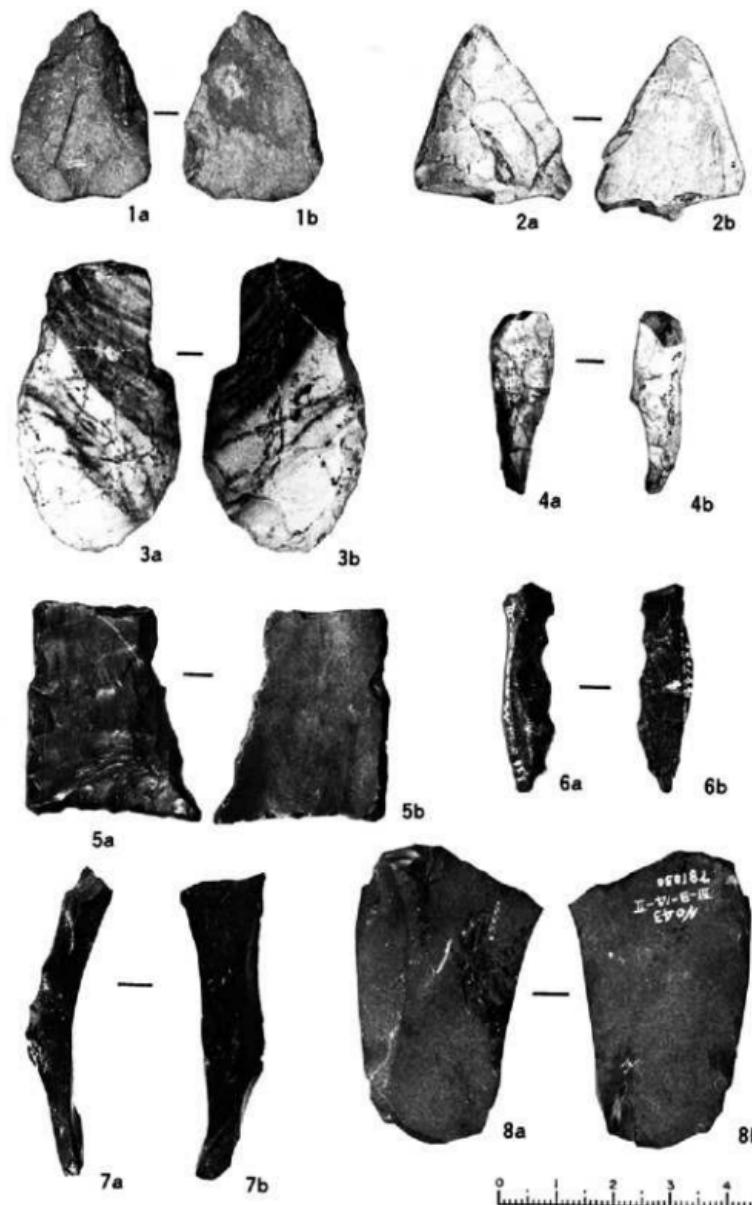
3

▲第Ⅰ次調査第1号方形周溝墓出土1・2 同1号掘立建物跡柱穴出土3



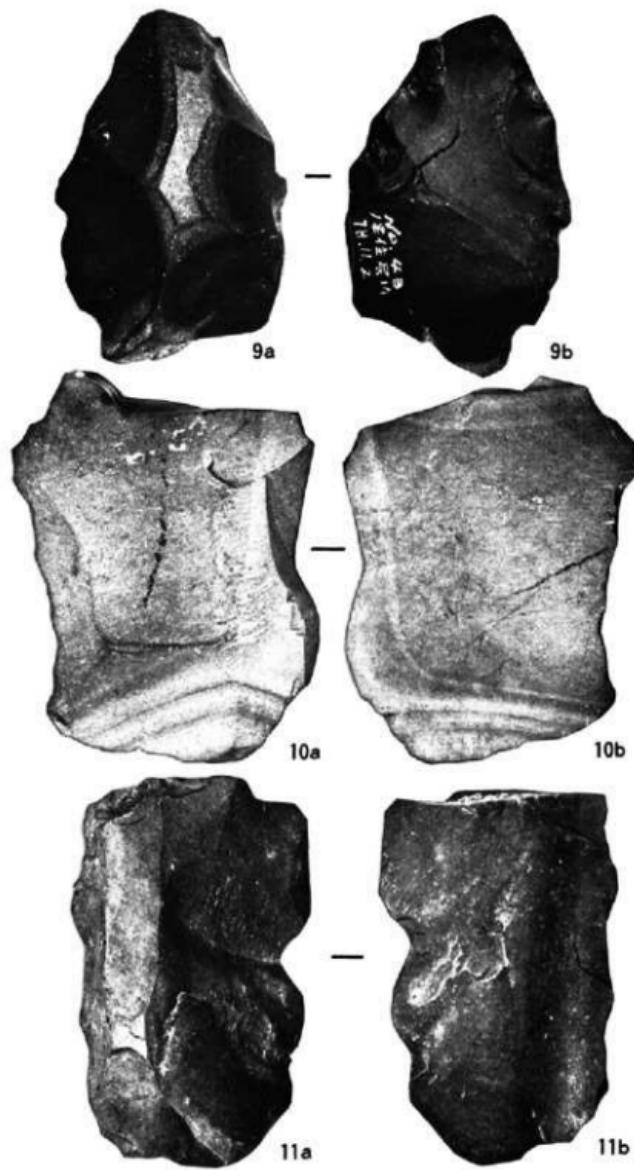
▲第Ⅰ次調査出土土器 1~23、第Ⅲ次調査出土遺物24~28

第十二図版 比丘尼平遺跡出土の石器(1)



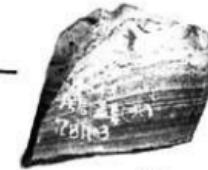
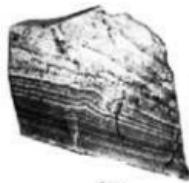
0 1 2 3 4 5 cm

第十三図版 比丘尼平遺跡出土の石器(2)



0 1 2 3 4 5 cm

第十四図版  
比丘尼平遺跡出土の石器(3)



0 1 2 3 4 5 cm